した。

これを聞いて居る内藏助の思ひや如何に？　哀々切々たるものがあつたであらう。

内藏助江戸へ入る

翌七日、いよ〳〵内藏助が江戸へ向ふ日とはなつた。内藏助は、潮田又之丞、近松勘六、菅谷半之丞、早水藤左衞門、三村次郎左衞門及び若黨の室井左六、その他仲間どもを加へて同勢十人、それ〴〵命に應じて本馬輕尻に跨り、早朝に京都を出發した。

そして出府が敵方に分るのを恐れて、長持二棹には「日野家用人垣見五郎兵衞」と大書した札を立て、途中公儀の關所〳〵を巧に欺き、悠々として東海道を江戸へ押し上つた。

十月廿一日に一行は鎌倉雪の下へ到着した。これは萬一の場合を氣遣つて、一先づ鎌倉で休息し、江戸の樣子を窺つた上、乘込まうといふ魂膽である。

内藏助の出府の報が早くも江戸の同志に知れた。それで吉田忠左衞門、富森助右衞門の兩人は先着した瀧尾孫左衞門を同伴して、内藏助が鎌倉へ到着した二十一日に、川崎在の平間村に出向いて、が

藏助一行の當分寓居たるべき家を見分した。これは助右衞門が浪人以來隱棲のために建てた家である。

忠左衞門は孫左衞門を準備のために殘して、自身はそのまゝ鎌倉へ赴いて、一行の遠來の勞を慰めた。そして諸般の打合せのために三日間ここに滯在して、廿五日に鎌倉を立つて翌日平間村の隱家に一行を案内した。

この隱家には十日間ばかりゐて江戸の樣子を窺つてゐた。が、その中に市内へ入つても差支へなしとの報知を得たので、一行は十一月五日、主税のゐる日本橋石町三丁目の小山屋旅館へと同宿した。

この小山屋は、多く訴訟人の宿泊する旅館であつたから、主税の垣見左内は近江の一豪家と稱し、公儀に訴訟の筋あつて江戸へ出向いたのだと觸込んでゐるところから、内藏助の垣見五郎兵衞は左内の叔父で、左内の後見のために出て來たのだといつた。

その他の人々は、或は親戚、或は手代、或は小者とそれ〴〵僞つて、いづれも變名して同宿した。

内藏助の出府を聞いて同志の者は非常に喜んだ。そして交る〴〵御機嫌を伺ひにやつて來たが、それでは人目に立ち易いといふので、此處へは一黨の領袖たる忠左衞門、惣右衞門、十内、時には久太夫等の數名のみの出入を許して、他はいづれも遠慮させることにした。そして會議の結果は使者を以て傳令するといふことを通達した。

しかもこれ等三四の人々は、深編笠を被り、時には町人となり、一刀差となつて變裝して、表口、また裏口からこそ〳〵と出入りしたのである。

同志の變名

これで同志が全部江戸へ集まつた譯である。しかし、各所に五人、七人と同宿してゐたのではどうしても人目につき易く、忽ち敵方に疑惑を抱かせることになるので、それを恐れていづれも變名を用ひ、身分職業もい、加減なことをいつて世間の眼を瞞着した。今その變名、假寓等を記して見る。

石町三丁目小山屋離座敷

垣見左内（店借主）……大石主税
垣見五郎兵衛（一名池田久右衛門）……大石内藏助
仙北中庵（或は又四郎）……小野寺十内
……（或は小田權六）……大石瀬左衛門
……（或は町人政右衛門）……菅谷半之丞
原田斧右衛門……潮田又之丞
森清助（一名三浦重右衛門又は田口三介）……近松勘六
……（或は町人嘉兵衛）……三村次郎左衛門
垣見家若黨……加瀬村幸七
同……宣井左六
森清助家來……甚三郎
以上の中、垣見左内は訴訟本人、五郎兵衛は叔父にて後見、仙北中庵は醫者。
新麹町六丁目大屋喜左衛門裏店
田口一眞（店借主篠崎太郎兵衛）……吉田忠左衛門
田口左平太……吉田澤右衛門
和田元眞（一名前原善藏）……原惣右衛門
松井仁平（或は町人八左衛門）……不破數右衛門
古澤吉右衛門（或は町人伴介）……寺坂吉右衛門
田口一眞は兵學者と稱し、和田元眞は醫者。

新麹町四丁目和泉屋五郎兵衛裏店

山彦嘉兵衛（店借主）……中村勘助

三橋淨貞……間瀬久太夫

三橋小一郎……間瀬孫九郎

郡八郎……岡島八十右衛門

岡野九十郎……岡野金右衛門

仙北又助……小野寺幸右衛門

三橋淨貞は醫者と稱す。

新麹町四丁目裏大屋七郎右衛門店

原三助……千馬三郎兵衛

柚莊喜齋……間喜兵衛

柚莊十次郎（或は柚莊伴七）……間十次郎

柚莊新六（或は松屋新介）……間新六

中田麟……中田麟平次

柚莊喜齋も醫者と稱した。

新麹町五丁目秋田屋權左衛門店

山本長左衛門（店借主）……富森助右衛門

これは妻子と同宿。

芝通町三丁目濱松町檜物屋惣兵衛店

高畠源之右衛門……赤埴源藏

塙武助……矢田五郎右衛門

初め八町堀、後に本町

村松隆圓（或は萩野隆圓）……村松喜兵衛

頭まで圓めて醫者を業としたから、宛然たる刀圭家であつた。妻子と同宿。

深川黑江町春米屋某店

西村丹下（店住主）……奥田貞右衛門

西村清右衛門……奥田孫右衛門

家族と共に同宿せり。丹下も刀圭を執り、少々醫者の眞似す。

芝源助町

内藤十郎左衛門（店住主）……磯貝十郎左衛門

植松三太夫（或は萩野十左衛門）……村松三太夫

富田藤五（或は町人助五郎）……茅野和助

南八町堀湊町平野屋十左衛門裏店

吉岡藤兵衛（店借主）……片岡源五右衛門

清水右衛門七（或は水木又七）……矢頭右衛門七

脇屋新兵衛……大高源吾

……（或は町人喜十郎）……貝賀彌左衛門

田中玄昌……田中貞四郎

吉岡藤兵衛は尾州浪人と觸込み、田中玄昌は醫者と稱した。

本庄林町五丁目紀伊國屋店

長江長左衛門（店借主）……堀部安兵衛

……（或は三嶋小一郎）……横川勘平

石田左膳（或は町人八兵衛）……木村岡右衛門

水原武右衛門……毛利小平太

……小山田庄左衛門

……中村清右衛門

本庄三ツ目横町紀伊國屋店

杉野九郎右衛門（店借主）……杉野十平次

……（或は町人嘉右衛門）……勝田新左衛門

渡邊七郎右衛門……武林唯七

杉野九郎右衛門は劍術の指南と稱した。

本庄二ツ目相生町三丁目

米屋五兵衛……前原伊助

小豆屋善兵衛（又は美作屋善兵衛）……神崎與五郎

兩人は吉良家の近傍に小店を開き、晝夜敵邸の偵察を怠らなかつた。

兩國矢ノ倉米澤町

……（或は馬洲平）……堀部彌兵衛
右衛門
妻子と同居。
本町一丁目七文字屋
……寺井玄達
川崎在平間村垣見五兵衛隱家
……（或は小田權六）……瀨尾孫左衛門
……矢野伊助
兩人は留守居役をつとめてゐた。
この他に倉橋傳介は米屋五兵衛の手代となつて敵情偵察に當つてゐた。早水藤左衛門は多分大石父子の許に同宿したものと思はれる。

軍令會議

内藏助が出府すると同時に、その本部たる小山屋旅館へ副統領吉田忠左衛門、原惣右衛門、參謀長小野寺十内を招集して、幹部の祕密會議を開いた。

その結果、黨中の壯年を四組に分け、毎夜交替にて吉良上杉兩家の動靜を探ぐることにした。で、命をうけた壯年輩は下人に、或は町人に身を變して、兩家の附近を徘徊して樣子を探り、事の大小を問はず、探ぐり得た事柄はいづれも幹部へ報告した。

しかし、統領達はこの重大なる役目を壯年輩にばかり任かしては置けぬ。忠左衛門の如きは毎夜のやうに自身も出かけて行つて、偵察の任務についた。それは單に吉良上杉兩家の動靜を探るばかりでなく、兩家附近の大路小路を始めとし、若し上杉家の襲擊を受けた場合には、何處の橋、何處の辻にて迎へ擊たんと、進退掛引のことまで豫め見極めて萬一の場合に備へて置いた。その用意周到さまた驚くべきである。

かうして敵情を偵察すると同時に、一方には内藏助の出入には必ず一二の勇士を附して、その身邊を警戒させることを忘れなかつた。何時途中に於て、吉良家の庇護者たる上杉家の連中に災危を蒙らされるか分らないことを恐れたからである。

× × ×

一黨がかうして、一擧の準備おさ〳〵怠りない時に、突如として次のやうな風評が嵐の如くぱつと

立つた。

「この頃赤穂の浪人が大分市中に入込んで、上野介殿を附け狙ふといふことだ」

これを耳にした内藏助は非常に憂へた。そこで一黨を集めて訓令した。

「もし不幸にして召使ひの仲間などが召捕られ、その口から計畫が露顯に及ぶやうなことがあつた場合には、武運も最早それ限り、この上は一同打揃うて名乘り出で、赤穂開城以來の顚末をありのまゝに申上げ、この年月の我等の苦衷を訴へて、その上何分の御處分を受ける外はござるまい。この旨確と御承知置き下されたい」

この訓令を互に心に染めて日夜活動をつゞけて居たが、何等捕吏に狙はれる危險にも出會はなかつた。

最後の血判

十二月二日の黃昏時である。深川八幡前の旗亭に、いろ〳〵な人物が――坊主、宗匠、醫者、町人の人々が、一人、二人、三人とつゞいて入つて行つた。

やがて一同の顏が揃ふと、世話人らしい一人の老人が、前へ進み出て、

「偖て今日の賴母子講は」

と、聲高らかにいつてから一座を見廻して、此度は一段と聲を落して、

「近頃また〳〵背盟者が出て申した。よつて今一回誓文に血を注いで、一層同志の精神を固め、また一つには命令を一般に頒つて、討入の約束を定めんがためでござる」

と、述べた。

これは吉田忠左衞門である。

そして忠左衞門と惣右衞門との起草になつた、一黨討入の綱領が內藏助の前に差出された。この綱領には「起請文前書」といふものがあつて、これは人々の名を署し、血を注ぐべき連判牒の誓文の冒頭に記載されたもので、綱領の神聖であることを一般に印象させて、違反者を出さないための用意のものである。

起請文前書之件

一、冷光院樣御尊讐吉良上野介殿討取るべき志ある侍共申合せ候處、この節に及び大臆病者共心を變じ、退散仕り候者を選び捨て、唯今申合せ、必死相極め候面々は、御靈魂も御

昭覽遊ばさるべく候事。

一、上野介殿御屋敷へ押込み働くの儀、功の深淺これあるべからず候。上野介殿の印揚げ候も、警固一通の者も、同前たるべく候。然れば組合働き役好み申すまじく候。尤も先後の爭いたすべからず候。一味合體、如何樣の働き役に相當り候とも、少しも難澁申すまじき事。

一、一味の各々存じ寄り申出られ候とも、自己の意趣を含み、妨げ候儀これあるまじく候。誰々にても理の當然に申合すべく候。兼て底意の不快これあり候とも、働きの節互に助合ひ、急を見つぎ、勝利の全きところを專に相働くべき事。

一、上野介殿十分に討取候とも、銘々一命遁るべき覺悟のなき上は、一同に申合せ、散り〴〵に罷りなり申すまじく候。手負の者あるに於ては、互に引懸け助け合、其場へ集まり申すべき事。

右四ケ條相背き候はゞ、此一大事成就仕るべからず候。然れば此度退散の大臆病者と同然たるべき事。

内藏助はつく〴〵と眼を通してから、

「自分所存のほどもこの外には出で申さぬ。殘るところもなうものされた」

と、莞爾として喜び、やがて一座の同志にこれを示した。

それから自ら筆を執つて連判牒の初めに署名し、血を注いだ。内藏助につゞいて同志は我も〳〵と自署し血を注いだ。

こゝに最後の盟約は出來たのである。

心得書十三ケ條

つゞいて討入當夜の心得を條目を以て覺書とし、一般同志に配布された。その覺書は次の通りである。

人々心得之覺書

一、定日相極り候はゞ兼て定め候通り、前日の夜中より物靜かに定め置き候三ケ處へ集まり申すべき事。

一、定日に至り候はゞ兼て定め候刻限に打立つべき事。

一、敵の印揚げ候時は、引取り候場へ持參いたすべく、其時の首尾次第、其骸の上着を剝取り、包み申すべく候。もし上使など御馳せ候はゞ、この首泉岳寺へ持參仕りたき存念に御座候。然れども御許しなくば是非に及ばず。御歴々の印、むざと打捨て難く候。御下知を以て彼の屋敷へ遣はされやうにも御座あるべきか。其段御指圖次第に仕るべく候。其上勝手次第とこれあるに於ては、泉岳寺へ持參仕り、御墓所へ備へ申すべき事。

一、子息の印揚げ候はゞ持參に及ばず、打捨て候覺悟、心得べき事。

一、味方の手負は隨分成り次第、引退き候分別肝要に候。然しながら肩にかけ候てもなり難き首尾に候はゞ、印揚げ候て引取り申すべき事。

一、父子討取候はゞ、相圖の小笛を吹き、段々吹聽、惣容へ知すべき事。

一、鉦の相圖は惣人數引取申すべき事。

一、退口は裏門より引取り申すべき事。

一、引取候はゞ無縁寺たるべく候。但し無縁寺へ入れず候はゞ、兩國橋東の橋際の廣場に打寄り申すべき事。

一、引取候節、途中へ、途所の屋敷方より人數を出し、押留め候ときは、挨拶の事。其覺悟申合せ候て、私共何方へも逃げ去り候こと更にこれなく候、無縁寺まで引取り、公儀御見分の御使を受け、旨趣を申上ぐべき志に候。さりながら御心許なく思召し候はゞ、寺まで御付なさるべく候。一人も退散の者これなき旨申すべき事。

一、彼屋敷より追手馳出で、追ひ來たり候はゞ、惣人數踏留り、勝負仕るべき覺悟、專一に候事。

一、勝負の内、御檢使これあり候はゞ、大門を開けず候て、潜より一人外へ出で、御挨拶申すべく候。勝負半ばに候はゞ、濟み候趣きの挨拶心得の事。其實を告げ、只今當人をも討取り申候。活き殘り候者ども呼び集め候て、追付け罷出で、御下知を受け申す覺悟に御座候。私共一人も退去候所存曾てこれなき旨申すべく候。門内へ御入り御見分これあるべしとの御事に御座候とも、暫らく御控へ下さるべく候。討入候者ども、屋敷中に打散じ居り申し候へば、門内へ御入り遊ばされ候時、卒爾の儀心許なく存じ奉り候。追付け門を開き、御目にかゝる旨を申し、堅く門を開き申すまじき事。

一、勿論の儀ながら討入候覺悟、惣容必死の心底、決定いたし候。右申し候引取り候時の儀申合せに認め候は、時に到り、心得のために候。退口の覺悟胸中に含み候ては、討入

り候處恐臆これあるべく候。然れども退去候ても必死の面々に候へば、討入るの時の丈夫の覺悟、專要の儀に候。申すに及ばず候へども銘々治定、粉骨の働き、尤もに候事。以上。

右の十三ケ條の心得書は、原惣右衞門によつて一々讀あげられた。人々はその度毎に、

「銘承仕つて候」

と、頭を下げた。

そして全部讀上げられた時、内藏助は改まつていつた。

「討入はいよ〳〵今月と決定申した。方々左樣心得られよ」

一同は雀躍した。

やがて會が終つて、いづれも喜色滿面に漂はしながら出て來て、夜の暗の中を何處へか散り〴〵に消えて行つた。

情報來たる

日本橋石町の本部へは同志から頻々として情報が集まつて來た。その中でも討入りに最も便宜を與へた情報の二三を擧げて見よう。

吉良邸の裏門に近い本庄相生町三丁目に、前原伊助の米屋五兵衞と神崎與五郎の小豆屋善兵衞の合同居があつた。この店は米穀類を始め、呉服、糸類、小間物に至るまで商つてゐた。そして番頭には倉橋傳介の十左衞門、若い衆には岡野金右衞門の九十郎などが店にゐた。主人の五兵衞は朝早くから呉服糸類を引つ擔いで店を出れば、善兵衞もまた小間物を背負つて出て行く。後には十左衞門、九十郎の二人がお客を引受けて商賣をする。しかも他の店よりはずつと安く勉强するので、それを聞き傳へて近所は勿論のこと、隨分遠い所から足を運んで買物にやつて來た。だから店はいつも大繁昌の有樣で、お得意はます〳〵ふえる一方だつた。

ところが金右衞門の若い衆九十郎は、この店へ買物に來る吉良家の子守の一少女といつしか相思の仲となつた。

この少女の叔父にあたる人で大工の棟梁があつて、少女はその叔父の世話で吉良家へ奉公に上つたのであるが、この叔父が吉良邸の先住者松平登之助の邸てあつた頃、これを請負つて建てたのである。だから叔父の手許にその繪圖面がある筈である。

これを聞き出した九十郎はます〳〵少女と親んで遂には結婚の約束までした。そして叔父なる人に會つてその許を得て、その引出物として例の繪圖面をくれるやうに頼んで手に入れた。そればかりではなく、それからこの少女の口から、十二月十四日の御茶會後は、上野介が麻布の上杉邸へ引移ることまで知ることが出來た。

このことが早くも本部へ報告された。

この圖面がどれだけ討入りに役立つたかは申すまでもない。

× × × × ×

そればかりでなく、この共同店の連中は、兎角屋根に登りたがつて困つた。といふのは、雨が降るといへば莚を持つて屋根へ駈上る。火事といへばすぐ走り上つて「何處だ、何處だ」と呼びながら四方をキョロ〳〵眺め廻す。これはいふまでもなく、かうして何彼と機會を作つては、屋根上から吉良邸内の樣子を眺めようとするのであつた。

× × × × ×

こんな場所へ店を開いたのもつまりは吉良邸の動靜を探らんためではあるが、それよりも相手の上野介の面體を見ておいて、討入の當日失敗せぬ樣にするためでもあつた。それで吉良邸から駕籠が出たのを見ると、五兵衞、善兵衞、または十左衞門、九十郎のいづれは店を飛出して行つて、その後をつけ、供廻りの中に面體を知るものがないと見ると、いつ何處でどう早變りしたか、此度は侍の姿となつて、つか〳〵と駕籠の側に近付いて、土下座をするのであつた。これは當時の制として主君同志親しい大小名の通行に會へば、家臣は土下座をするのである。

この場合には主人公は乘物の戸を開け目禮し、または「誰の衆でござるか」と聲をかけるのが例であつた。

で、店の連中もこの筆法を利用したのである。そして上野介の面體を見極めんとしたのである。それが旨く圖に當つた。

或る日、例の如く土下座してゐると、上野介は乘物の戸を開いて「誰の衆ぞ」と問うた。此方は出鱈目に「松平肥前守家來にござりまする」と答へた。すると「姓名は何んと申される」「輕き者にて名を申上げるほどでもござりませぬ」といふ中に相手の面體をよく見てしまつた。

× × × × ×

堀部安兵衞が、親交のあつた羽倉齋といふ神道家から、茶道の宗匠四方庵山田宗遍が吉良邸へ出入するといふことを聞き出した。

それを安兵衛は早速内藏助に報告した。

「それは耳寄りなこと、一黨中に誰か茶道の心得のある者はござらぬか」

内藏助は非常に喜んで、さういふのであつた。

「ござりまする。大高源吾は亡君御在世の時、折々殿の御對手を仰せ付かつて居りました」

安兵衛はその人を指名した。

「然らば源吾に四方庵へ弟子入りさせて、吉良殿の樣子を探ぐらせることしよう」

早速源吾は呼出されてこの旨を言ひ含められた。源吾は承諾して、髪も小銀杏に結ひ直し、衣服を改め、兩刀をも捨てゝ純然たる町人の姿に扮し、京都の吳服屋新兵衛と稱し、四方庵を訪ねて弟子入りの束修として金千疋を呈し、

「私年來茶を好みますので、此方へ出ましても稽古をいたしたいと存じ、先生の御高名を承り、御指南を仰ぎたいと、御伺ひ申しましたる次第にござりまする」

と、いとも丁寧に述べた。

相手の服裝から、態度から、言語からして如何にも豪商の旦那らしいので、四方庵は早速入門を許した。

それで源吾の新兵衛は折々訪ねて稽古を願つてゐる。四方庵もまた新兵衛を二となき弟子として親切に敎へてくれた。

十二月に入つた一日、新兵衛は四方庵について茶道の敎へを請うてゐる時、計らずも見出したのは、

「來る六日吉良樣御茶會」

の名讃日程であつた。

源吾はこのことを内藏助に報告した。

内藏助はこれを聞いて、

「それに相違なくば五日の晩に討入らう。しかしながら尙ほよく突きとめるやうに」

と、いつた。

源五は再び四方庵の許へ來て、さりげない風で、

「吉良樣の御茶會は六日とのことでござりまするが、まことでござりまするか」

と、問うた。

「六日に御催しの筈だつたのが、都合によつて十四日に延引となりました。同夜は御年忘れの御茶會で、大友近江守樣などを御客として御出でと承る。拙者もその御相伴に參る筈でござる」

何も知らぬ四方庵は、寧ろ得意げにさういつた。

それから源吾は十三日になつて再び四方庵を訪ねて、一匹の縮緬を進物に差出して、

「當地に於て越年のつもりで居りましたるところ、商用の都合で近々京都へ引返す事になりました。つきましては御名殘に、明十四日はお別れに御風味を一服頂戴いたしたいものでござるが」

と、申入れた。

「それはまことにお名殘り惜しい。が、先日も一寸申上げました通り、明十四日は吉良樣へ參會のお約束なれば、それ以後なれば何時にても」

四方庵は答へた。

「左樣なれば明後日にてもお邪魔をいたしませう」

源吾は本部へ駈付けてこのことを知らせた。

これによつて、

「十四日夜、一擧を決行する」

との決心は一同に急告されたのである。

口上書

これ等の情報によつていよ〳〵討入りは十四日の夜と決まつた。

それで内藏助は一篇の宣言書を作らせた。これは討入りの當夜敵營若しくはその附近に遣し置き、一つには柳營に一擧の趣旨を告げ知らせ、二つには天下に大義を舒べんとの用意のためである。次の通りである。

淺野内匠頭家來口上

去年三月、内匠頭儀、傳奏御馳走の儀に付き、吉良上野介殿へ御意趣を含み罷りあり候ところ、殿中に於て當座忍び難き儀御座候て、刄傷に及び候。時節場所を辨へざる働き、不調法至極に付き切腹仰せ付けられ、城地赤穗召上げられ候儀、家來共まで畏入り存じ奉り候。上使の御下向を受け、城地差上げ、家中早速離散仕り候。右喧嘩の節、御同席に御差止めの御方あり、上野介殿討留め申さず候。内匠頭末期殘念の心底、家來共の忍び難き仕合せに御座候。高家の御歷々に對し、家來共鬱憤を挾み候段、憚りに存じ奉り候へども、君父の讐、俱に天を戴く

べからざるの儀、默し難く、今日上野介殿御宅へ推參仕り候。偏に亡主の意趣をつぐまでの志までに御座候。私共死後、もし御見分の御方御座候はゞ、御披見を願ひ奉り、斯くの如くに御座候。以上。

元祿十五年十二月　日

淺野内匠頭長矩家來

そしてこの口上書を、一擧決定後、吉良邸から引上げる時、文箱に入れ、竹に挿み、人目につき易い場所に立てゝ置くことを内藏助は命じた。

内藏助の手紙

一擧の時期がいよ〳〵確定したので、一黨の人々はいづれも死後の準備までした。親近者に送るべき遺書を認める。妻子はそれ〴〵仕末する。一擧に關する書類は燒き捨てる。そして從僕には暇を遣はした。

十二月十三日のことであつた。内藏助は若黨の左六、幸七の兩人を呼び、

「火急の用が出來たから國許まで書狀を遣はさなければならぬ。御苦勞でも兩人で向つてくれい」

と、命じゝ。

一擧の切迫は樣子によつて知れて居る。さてはそれとなく暇を出されるのかと、何處までも主人に殉じようとの決心の兩人は、

「如何やうな御用かは存じませぬが、年内ももはや餘日もございませねば、來春早々に遊ばされて如何でござりませう」

と、いふ中に、もはや涙聲である。

「それが延々にされぬ大切な用事、急いで參つてくれい」

内藏助は嚴としていつた。

「大切な御用と仰せまするならば、兩人氣をつけて只今から出立いたしまする」

悄然として再び涙を押へた。

内藏助は兩人の心持をよゝ察してゐるだけに、その心根が思ひやられて一層不憫が增するのであつた。

「では氣をつけて早速出立してくれい。しかし、當地には仔細はない。安心して參れ。書狀は伏見の大塚屋まで屆ければ宜しい」

そして內藏助は兩人に餘分の金子まで與へて出してやつた。

その書狀の內容は次の通りである。

家來左六幸七暇遣し登せ候間、一筆啓上申し候。甚寒に御座候へども、各樣いよ〳〵御堅固、珍重に存じ候。其許城主も仰せ付けられ、珍重の御事に御座候。前々の通り相違なく、寺社領も遣はされ候や、心元なく存じ候。

私在京の內は何角と心ひまを得申さず候て、書狀を以て御意を得ず、御無音に罷り過ぎ候。兼て御聞及びもなさるべく、十月初京都出足、異儀なく父子共下着、仕候事に候。今日まで一段と兩人共無病にて罷在り候。まことに佛神の御加護と有難く喜悅仕り候事に御座候。在京の內は公儀よりも拙者に附人これあり、一足も踏出し候儀ならざる旨、確かなる筋より聞き出し候などとて、岡本次郎左衞門、糟谷勘左衞門等彼是申し候へども、不確かの儀、承り申し候とに及ばず、もし左樣の儀も候はゞ、其節の了簡これあるべくと、其手だても致し罷り立ち候處へ道中御關所滯りなく下着仕り候。申し談じの鎌倉へ立寄り、五六日滯留〳〵それより川崎在平間村と申す處に在宅申し、其後石町へ借宅致し、父子、十內、又之丞、勘六、瀨左衞門、半之丞、次郎左衞門及び左六、幸七、甚三郎の三人の家來にて罷りあり候。同志の者共麴町に四軒、湊町、源助町、石町、本庄に二軒、都合十軒餘に五十餘人借宅申候。六角により浪人共追々下着、拙者共罷り下り候取沙汰色々これあり、御老中にも御存知の旨に候へども、各別其通りになし置き下され候と察せられ候。亡君のため忠死を感じ思し入る道理か、何の滯りもなく、安堵罷りあり候。折々上野介殿他行を承り、書夜心をくだき、途中心がけ候へども、不仕合にて出合ひ申さず、居屋敷へも二三度間者を入れ申し候處、滯りなく、これによつて近々打込申すことに候。この上ながら首尾よく兼ての本望達し候樣願はしく存じ候。もはや間もあるまじく、其節の趣追々御聞き及びこれあるべく候。

上方にて追々變心の者共の儀、御聞き及びなさるべく候。佐々小左衞門父子恙なくこれあるべく、上方にて岡本次郎左衞門、糟谷勘左衞門、小山源五左衞門、進藤源四郎、仕方ぜひに及ず、人外のことゞも、品々さまゞのことども、申すも御恥かしく存じ候。奧野將監、河村傳兵衞存外の儀どもに候。只今に至り候ては、岡林杢之助、外村源左衞門、八島惣左衞門了簡まし と存ずることに候。當地に下り候にも、中田理平次、中村清右衞門、鈴田重八、家來瀨尾孫

左衞門、矢野爲助、ここ許勝手にては、田中貞四郎、小山田庄左衞門立退き申候。古今珍らしからざることに候へども、これまで罷り下り候ところに、右の通り驚き入り申候。孫左衞門儀は、山科に於て達て差留申候へども、却て腹立ち申し罷り下り、事急に罷り立去り候。當然拙者外聞と申し、死後までも人に喜悅申し候ところ是非なき次第に候。右の品々申入れ候ことにもこれなく候へども書付け候。

此度暇遣し候家來兩人事、こゝ許無人、相宿も多く候へども、晝夜骨を惜まずつとめくれ、過分、不便に存ずることに候。急なることにこれあるべくと存じ、暇遣し候。拙者存命二つもこれあり候はゞ、この兩人事は、何方へなりとも無心申し、安座申し候やうにしつかはしたきほどに存じ候。役にも立ち申すべき者にて候。もし相應の思召も御座候節は、この者の儀、御言葉添へらるべく賴入り候。

此度申合せ候者共四十八人にて、斯樣に志を合せ申す儀も、冷光院殿此上の御外聞と存ずるとに候。死後御見分のため遣し置き候に上書一通、うつし進候。何れも忠信の者どもに候間、御回向をもなし下されたく候。其場にて生殘り候者ども、定めて引出され御尋ね御仕置にも仰付らるべく、勿論其段人々覺悟の事にて候。御心易かるべく候。尙樣子御聞なされたく候はゞ京都寺井立溪へ御尋ねなさるべく候。樣子候てよく存じ罷りあり候。

將又た拙者の妻こと、存じ寄り候て、京より離別仕り、緣者方へ返し申候。怜、娘儀いか樣に罷りなり候とも、それまでのことに候。存じ寄らざることに候。以後萬々一別條なく、世間に罷りなり候やうにも候はゞ、吉之進は一度武名の家を起し候樣に仕りたきことに候へば、少々心底にかゝり申候。此儀も存じまじきことに候へども、人情凡夫の拙者に候へば、御恥かしきことに候。さりながら一事の邪魔に罷りなり候やうなる所存、毛頭御座なく御氣遣下さるまじく候。

良雪樣、去年以來の御物語、失念仕らず、日々存出し、此度當然の覺悟に罷りなり忝けなき次第に御座候。日來御心易く御意を得候各位故、別して御殘り多く、御暇乞ひかたぐ、斯の如くに御座候。死人に口なし。死後いろ〳〵の批判とりぐこれあるべしと察せられ候。知貞御坊へも同前に申したく候。遠林寺、神宮寺、もし噂も御座候はゞ、宜しく御心得下さるべく候。恐惶謹言。

十二月十三日　大石内藏助華押

惠　光樣

良　雪様
神　護　寺様

尚々この書狀、家來に遣はすべしと存じ候へども、もし道中にて滯り候ては如何と存じ、差控へ候。死後大津より其許へ相達し候やうにと賴置き候。家來兩人登せ申すに付、昔の鬼王、團三郎もかくやあらんと、泪に一笑申すことに候。以上。

右の手紙の宛名の惠光は赤穗華岳寺の現住、良雪は徒弟として華岳寺に在つたが、當時新濱の正福寺の住職となり、神護寺は周世村にある大石家の持佛寺。內藏助の祖父が持佛の觀世音を安置せしために建てた寺である。

討入りの訓令

十二月十四日！　血を吐く思ひで待ちに待つたその日はとう〳〵やつて來た。前夜から降り出した雪は、幸にも今朝に至つて止んで、江戸の町々は一面に銀世界と化した。

今日は故內匠頭の命日である。內藏助を始め、重立つた同志の者十餘人、今宵討入りの首尾を墓前に祈り、且つは更に討入りの手筈を極めるために、雪を踏んでいづれも泉岳寺へ集まつた。

「永い間の君の御鬱憤、我等家來一同四十七人にて今宵こそ御晴し申す時期に際會いたしました。君の御尊靈の御導きによつて、必ず本望を達しますれば、何卒君にも泉下に安らけく鎭まり給ふやうに、これが御名殘りの御暇乞ひでござりまする」

內藏助は亡君の墓前に額いて一同を代表して申上げた。他の同志の者はいづれも深く頭を垂れて、心の中で御暇乞を申上げた。

それから一同は方丈へやつて來て、

「今日は先君の御命日ゆゑ參詣いたしたのでござるが、我々舊同僚は、近々いづれも四方へ離散いたすことになつて、再會のほども覺束ない。それで別離を惜しみたう存ずる故、御一室にて御齋にも預り、ゆる〳〵物語りいたしたう存ずれば、此儀御許しを願ひたうござる」

と、いつて白銀三枚を包んで差出した。

「それは御心易いこと、どうぞ御通りなされ。」

一同は客殿に案內され、やがて膳が運ばれた。

食事が終ると膳部を退けさせて、間の襖を閉め切つてしまつた。

その時、内藏助は客を正して口を切つた。

「一般の方略は前に決定した起請文の前書及心得の覺書にて盡きてゐる　今は討入の手立を申すべし。一黨四十七人を甲乙の二隊に分け、拙者はその甲隊を以て東面の表門から攻め入るでござらう。悴主税は乙隊と共に西面の裏門から攻め入るべし。主税事は御覽の通りの若輩にござれば、其方面は吉田殿小野寺殿二老の御後見を頼み入る。總じて三人一組となり、進退を共にせらるべし。目ざすは上野介殿一人でござるぞ。餘の敵に關はつて時を移してはならぬ。手強き　輩　支へなば追取圍んで討取られよ。衆士は一人一體でござる。役の輕重、功の高下はこの場合には論ずるところでござらぬ。室内の戰ひは若手の事、老功の方々はすべて室外にあつて口々を固め、敵の逃脫に備へ、兼ねて壯年を激勵せられたし。人々の進退は合符を見あひ、室内暗うしてあやめも分からずば、互に合言葉を用ゐられよ。身方一處に相會うて「山」と問はゞ「川」と答へ、同士討を避けねばならぬ。もし合言葉をかけられて、早速の返答にためらふ者は、會釋なく討つて捨てられよ。其他は豫定の通りと心得たまへ。今夜丑の上刻（午前二時）までに、必ず例の三個所に參集せらるべし。何れもこの義を一黨の衆に傳へ、用意せられよ」

「承知仕つてござる」

一同は正午近い頃、それ〴〵準備のため泉岳寺の門を出た。

主家の凶變が赤穗に達した時、城中に集まつた者は三百餘人だつたのが、籠城、殉死と聞いて六十一人に減じ、主家再興の希望が見えかゝるやうに思はれた時は百二十四人の同盟者となり、一黨東下の日には五十五人となつてしまつた。そしていよ〴〵討入りといふ段になると、僅かに四十七人となつてしまつた。今その四十七人の義徒の役廻及年齡を擧げて見よう。

大石内藏助良雄	家老	千五百石	四十四歳
同　主税良金			十五歳
片岡源五衞門高房	内證用人兼兒姓小頭	三百五十石	三十六歳
原惣右衞門元辰	足輕頭	三百石	五十五歳
堀部彌兵衞金丸	元江戸留守居役	三百石	七十六歳
近松　勘六行重	馬廻	二百五十石	三十三歳
吉田忠左衞門兼亮	足輕頭兼郡代	二百石	六十二歳

同　澤右衞門兼貞		大目附	二百石	二十八歳
間瀨久太夫正明				六十二歳
同　孫九郎正辰	馬　廻	二百石		二十二歳
堀部安兵衞武庸	馬廻兼國圖繪奉行	二百石		三十三歳
潮田又之丞高敎	馬　廻兼使役	二百石		三十四歳
富森助右衞門正因	馬　廻	二百石		三十三歳
赤埴　源藏重賢	元馬廻	二百石		三十四歳
不破數右衞門正種	物頭並	二百石		三十三歳
岡野金右衞門包秀	京都留守居	百五十石		二十三歳
小野寺十内秀利				六十歳
同　幸右衞門秀富	馬廻兼武具奉行	百五十石		二十七歳
奥田孫太夫重盛				五十六歳
同貞右衞門行高				二十五歳
大石瀨左衞門信清	馬　廻	百五十石		二十六歳

木村岡右衞門貞行	馬　廻	百五十石		四十五歳
矢田五郎右衞門助武	馬　廻	百五十石		二十八歳
早水藤右衞門滿堯	馬　廻	百五十石		三十九歳
磯貝十郎左衞門正久	物頭役	百五十石		二十四歳
間　喜兵衞光延	馬　廻	百　石		六十八歳
同　十次郎光興				二十五歳
同　新六光風				二十三歳
中村　勘助正辰	馬　廻	百　石		四十四歳
菅谷半之丞政利	馬廻兼代官	百　石		四十三歳
千馬三郎兵衞光忠	馬　廻	百　石		五十歳
村松喜兵衞秀直	中小姓兼扶持奉行	二十五人扶持	二十石	六十一歳
同　三太夫高直				二十六歳
岡島八十衞門常樹	中小姓兼御勘定方	二十五人扶持	二十石	三十七歳
大高　源吾忠雄	中小姓兼膳番元方金奉行腰物方	二十五人扶持	二十石	三十一歳

倉橋　傳介武幸	中小姓	二十石五人扶持	三十三歳
矢頭右衛門七教兼	兒小姓	二十石五人扶持	十七歳
勝田新左衛門武堯	中小姓	十五石三人扶持	二十三歳
前原　伊助宗房	中小姓兼金奉行	十石三人扶持	三十九歳
貝賀彌左衛門友信	中小姓兼藏奉行	金十兩米二石三人扶持	五十三歳
武林唯七隆重	中小姓	金十兩三人扶持	三十二歳
杉野十平次次房	中小姓	金八兩三人扶持	二十七歳
神崎與五郎則休	横目	金五兩三人扶持	三十七歳
茅野　和助常成	横目	金五兩三人扶持	三十六歳
横川　勘平守利	歩行	金五兩三人扶持	三十六歳
三村次郎左衛門包常	臺所役	七人扶持	三十六歳
寺坂吉右衛門信行	足輕	二人扶持	三十八歳

一　黨の裝束

時刻はだん〳〵迫つて來た。同志の者は、「覺書」の第一條により、指定された三ケ所の集合所――第一は本庄林町の堀部安兵衛の宅、第二は本庄三ッ目横町の杉野十平次の宅、第三は吉良邸に最も近い本庄二ッ目相生町三丁目の神崎前原の共同店へと、三々伍々約束の時刻に遲れまいと集まつて來た。そして各自が携へて來た風呂敷包を解いて裝束に取りかゝつた。その扮裝を見るに、壯年達は多くは緋紗綾の褌、老輩は白紗綾のそれを紐をもつて各々頸から吊り、白無垢、黃無垢、淺黃無垢の羽二重の下着の上に、繻子、繻珍、緞子包みの衷甲を重ね、腰から下には膝甲をめぐらした。そして兩臂には臂鎧をつけた。衷甲の上には更に紅色、桃色の絹裏したる定紋つきの黑小袖を着、褌襠にも鎖を包み、浮紋などの伊賀袴を穿き、帶の上にもまた更に鎖入りの上帶をしめて、脛には脛當て、脚には陣草鞋または陣足袋を穿いた。最後に黑羅紗の羽織をまとひ、その兩襟と兩袖の端に白布を縫ひつけて、身方同志の合符とし、白布の端を後方に廻して、これには「淺野內匠頭家來何某」と一々姓名を記しつけた。

かうして裝束した上に、鎖入りの縮緬のしごきを襷にかけた。黑革色に八幡座から白革の筋を入れ、思ひ〳〵に好みの鍬を綴ぢた兜頭巾に、緋縮緬、調帶、眞田打などの忍びの緒をつけ、名香を薫込んで頭上に戴いた。

それから討入りの際甲乙丙隊の混淆を避けんがため、甲隊は「い」の字から「ち」までを左文字にして圓き前立の上に雕りつけ、乙隊は「り」の字から「よ」の字までを右文字にして同じやうに雕りつけて、戰友ごとに同字を用ひ、一目に各自の部隊別、戰友別が分るやうにした。

而して首領の內藏助の扮裝はといへば、瑠璃紺緞子の衷甲の上に、家の定紋着けた黑小袖を着、黑羅紗の羽織をはをり、精巧な兜頭巾を被り、黃金作りの兩刀を帶し、軍麾を腰に挾んで優然として推出したところは、さすがに一黨の首領らしく思はれた。

その內藏助が、この際に於ても尙且つ用意周到の人であつた。といふのは、今日あるを慮つて か、赤穗退城の時、多くの刀劍を自分の手許に預つて置いたのを、此度同志の人々に分與したのである。それで十石二十石の士から五兩三人扶持の步行橫目に至るまで、皆分不相應な兩刀を持つことが出來たのである。そしてこの刀はいづれも柄のところを平打の木綿糸で卷いて卷切柄となし、戰ひの場合に手から滑り出ないやうにした。

討入りの武器

一黨は兩刀の外に、討入りに際してどんな道具を使用したかといふに、次のやうなものであつた。

卽ち、

槍	十二筋	長刀	二振
野太刀	二振	弓	四張（內半弓二張）
鉞	二挺	大槌	六挺
竹梯子	二挺（大小）	火鋸	二枚
源翁	二挺	木槓杆	二挺
鐵槓杆	二挺	鐵槌	二挺
鑓	六十本	取鉤（長細引付）	十餘筋
龕燈	一個	小笳	數十個
銅羅	一個		

以上の中、槍は大抵九尺柄のものであつた。これは室内戰を豫想してのことである。弓の中に二張の半弓を加へたのも同樣である。大工道具は門戸の破壞用。鑓は敵が逃るために諸所に小門潛戸があると聞いてゐるので、それ等を打着けて出られないやうにするためである。長細引付の鈎は、これを投げかけて長屋の屋根を乘越えんため、龕燈は敵の首級を見んため、小笛は呼子笛、銅羅は一黨引揚の合圖に用ひるためのものである。

出發

一黨の人々には丑の上刻から下刻卽ち午前二時から三時の間に、指定の集合所へ全部集まつて來た。そして各集合所で裝束に身を固めた一同は、寢鎭まる深夜の街を、雪を踏んで、第一、第二の集合所を出て、第三の集合所たる神崎前原の共同店へ來た。

「寅の上刻（午前四時）！」

突然誰かがいつた。

その聲を聞くと、內藏助は命令を下した。

「出發」

一同は急に緊張し、眼を輝かせ意氣衝天で、神崎與五郎を先導として出發した。「淺野內匠頭家來口上書」と文函の上に書した宣言書を結びつけた長竿を一人が捧げ、その後から弓、槍、長刀、大槌、竹梯子などを引擔いだ面々が列を正しく附き從つた。

見渡す限り白皚々、四邊には犬の遠吠え一つ聞こえない眞の靜寂の街中を、黑裝束の一團が月に照らされながら、聲を呑んで肅々と練つて行くのである。

やがて吉良邸の近くに進んだ時、

「止れ！」

の號令はかけられた。この時內藏助は一黨に向つて、

「方々、こゝを最後として何れも奮鬪せられたし。萬が一にも敵を討漏らすことあらば、我等の武運もこれ限り、一時に邸に火を懸け、猛火の裡に腹掻き切つて、亡君に泉下に追つき奉るまでゞござる。その覺悟にて銘々忠勤を勵まれよ。いざ各組に別れて、敵の邸に取掛られい」

と、奮勵一番、號令を下した。

ソレ！といふ間に、一黨は東西の兩部隊に分れて、甲隊は內藏助の指揮の下に表門に向い、乙隊は

吉田忠左衞門が先頭に立つて裏門へと向つた。

こゝで吉良家の樣子を述べて置かう。

凶變以來、吉良家では出來るだけの警戒をした。親族の間柄にある上杉家では、腕利きの士を送つてまで吉良家を庇護した。そして、赤穗の藩士の復讐に對して嚴重に備へてゐた。が、それが內藏助の策略にまんまと乘ぜられて、いつとはなしに警戒の手を弛めるやうになつた。上野介にしたところで、もはや赤穗浪人は自分に對して復讐する考へを捨ててしまつたらしい、內匠頭は何んと不義な家來ばかりを持たれたものか！そして結局それを命冥加に思つて、まづこれで自分も安泰である位に考へてゐたであらう。

さうした呑氣な氣持で、今宵は年忘れの茶の會を催して、舊同僚の大友近江守等を招待して夜の更けるまで得意然たるものがあつたであらう。

客が歸つてしまふと、さすがに氣疲れが出たと見えて、急いで寢床を延べさせて行燈に灯を入れて横になつた。横になると、すぐにいとも安らかな寢息が聞こえ出した。

上野介は去年九月に吳服橋內からこの本庄松坂町二丁目に邸替へを命ぜられたのであるが、この邸は東西三十間、南北二十間の可成り廣い屋敷で、東は一帶に長屋で、こゝに表門があつた。往來を

隔てて向側は、旗本牧野長門の邸、西もまた一帶に長屋になつてゐて此方に裏門があつた。その向うは回向院。南は高塀をめぐらして相生町の往來に臨んでゐる。北は松平兵部太輔の家老本多孫太郎の邸と、旗本土屋主稅の邸に接して居る。

で、表門から入ると、玄關、書院、納戸、居間、この居間は左兵衞義周の室である。それから中庭を隔て、奧廊下を傳うて行くと、そこに上野介の居間がある。この居間が回向院の方へ極近いので、上野介は、出入口はいつも裏門を通ることにしてゐた。だから一黨が表門だけ攻めたならば、裏門からうまくと逃げられてしまつたのである。

表門へ

表門はさすがに大手の本門だけに、構造が堅牢で、容易に破壞することが出來ない。それを平生から見て置いたので、甲隊がこの門へ突進するや、

「ソレ乘越せ！」

との號令の下に、二挺の梯子は投げ掛けられた。

大高源吾、小野寺幸右衞門、吉田澤右衞門の若手の連中は先を爭つて、雪の積つて居る屋根へと駈け登つた。これを見た若手の連中は「してやられた」と、我も〳〵とつゞいて猿の如く駈け上つた。その後から七十六歳の彌兵衞老人までが元氣に傳ひ登つて行つた。

それで、一時は長屋の屋根の上には、異形な扮裝をした黑影が、烏の樣に群がつた。氣早い連中は、ひらり〳〵と內庭へ飛下りた。その間に梯子は此方へ移されて、それを傳つて一同が內庭へと降り立つた。

表門へ向つた甲隊は、

片岡源五右衞門、富森助右衞門、武林唯七、奧田孫太夫、矢田五郎右衞門、勝田新左衞門、寺田澤右衞門、岡嶋八十右衞門、小野寺幸右衞門は正面からひた押しに押し進めば、早水藤左衞門、神崎與五郎、矢頭右衞門七、大高源吾、近松勘六、間十次郎は側面から前進する。

大石內藏助、原惣右衞門、間瀨久太夫は表門に立つて一同を指揮する。

堀部彌兵衞、村松喜兵衞、岡野金右衞門、橫川勘平、貝賀彌左衞門は新門を守つて敵の逃げ道を絕つて居る。

この時、表門內に詰めてゐた門番の足輕三人が、たゞならぬ物音に眼をさまして、何事が起つたのかと、眠い眼をこすり〳〵出て來て見ると、この光景に仰天して、思はず聲を張上げようとするところを捕へられて、高手小手に縛り上げられてしまつた。

やがて四十七人連署した一黨の宣言書「淺野內匠頭家來口上書」を結びつけた長竿が、玄關の正面に立てられた。これと同時に喊聲は一時にドッと擧がつた。

「淺野內匠頭が舊臣共、上野介の首級を申受けて、亡主の無念を晴らさんがため、只今推參いたしてござる。早々こゝに御出會ひなされ」

口々に大音聲で名乘りを上げた。

「素破！赤穗浪人の討入りだッ！」

邸內長屋の連中は色を失つて上を下への狼狽の仕方である。

これを見た內藏助は、つゞいて大音聲で訓令した。

「出會ふ者は討つて捨てよ。逃れる者は助け遣せ。目指すは上野介殿一人ぞ。餘の敵にかゝはつて時を過すな。味方はお互に助け合ひ、一人敵に當られなば、左右から追取圍んで、卽時に討取つて過ぎ給へ」

これを聞いた邸內に住む連中は「命あつての物種」と、いづれも身を小さくして再び蒲團の中へも

ぐり込んでしまつた。

正面玄關の大戸はばり〳〵と打破られた。それと同時に、一同がどつと内部へ押入つた。と、三人の侍がいづれも追取り刀で立現はれて刄向つて來た。相手も相當に使手と見えて、三人互に身を寄せ合はせて、前後左右からの襲撃に構へた。そして太刀を抜いて身構へて、なか〳〵敵を寄せつけまいとした。

しかし、相手は三人、此方は多數なので、その上殊に嚴重に身ごしらへをして居るので、いづれも拔き合はして、追取圍んで、ひた押しに押して行つた。

「鋭ッ！」

その中に小野寺幸右衞門は、掛聲諸共一人の敵の高股を切落した。敵は堂と倒れた。それを見ると他の二人はいくらか氣臆れが出たか、急に浮足になつて、隙があらば逃げ出さんとする氣勢が目立つて來たので、そこを附入つて、十數本の白刄が一時に迫まつて目茶〳〵に切込んでしまつた。そしてそのまゝ一同は奥へと進まんとした時、廣間の間に幾十張の弓が立てかけてあるのを發見した。

「敵方に弓の用意があると兼ねて聞いてゐたが、このことなるか。斯樣なもので射すくめられてたまるものか！」

幸右衞門は刀を揮つてばらばらに弦を斷つてしまつた。

その中に、彼方からも此方からも敵方が現はれて、此處彼處に劍戟が始まつた。戸障子の倒れる音、婦女子の泣叫ぶ聲、太刀打の響、掛聲などが激しくなつて、だん〳〵室内戰の烈さを思はせた。

× × × × ×

矢田五郎右衞門等の一團は廣間を通り、尙も奥へ進まんとした時、不意に物蔭から一人の敵が跳り出て、後方にゐた五郎右衞門の背後から眞二つになれと切付けた。しかし、衷甲のために肌には達しなかつた。

「卑怯者！」

五郎右衞門は振返りざまに横に拂へば、

「アッ！」

と、悲鳴を擧げて敵は其處にあつた火鉢の上へ倒れてしまつた。其處をすかさず二の太刀で切下した。あまり力がこもつてゐたと見えて、相手の胴を眞二つに切つて、餘勢は深く火鉢にまで切込んでしまつた。そのために切尖下り五六寸のところから刀はポッキリと折れた。

「えッ！」

五郎右衞門は恨めしさうに舌打して、敵の刀を奪つて奥へと向つた。

× × × ×

武林唯七は廣間から、書院を通りぬけて、尙も奥へ進まんとした時、傍の屋から、一人の若殿原が現はれて、薙刀を持つて刄向つて來た。

「對手に取つて不足なし」

唯七は一二合を合はすや、いきなり對手を臨んで太刀を振下した。と、刀の切尖が僅かにその額を掠めるか掠めないのに、敵は薙刀を其處に放出して這々の體で逃出した。それを追ひかけて追擊を喰はすれば、これまた肩先に僅かの擦りを負はせたまゝである。

「しまつたッ」

と、尙も追はんとした時に、傍から一人の敵が現はれ喰止めた。

「小癪なッ！」

唯七は怒つて打込まんとすると、とつ〳〵と逃げ出して行つた。こんな弱蟲共を追つてもつまらないと思つて、落ちてゐる薙刀を拾い上げて見ると、その金具には吉良家の定紋の五七の桐が鏤めてあつた。

「偖ては佐兵衞義周殿であつたか、それなれば逃がすのではなかつた」

口惜しがつても既に後の祭であつた。

× × × ×

側面から向つた一團の一人近松勘六が、奥へ討入らうとすると一人の敵に出會つた。互に渡合つてゐるうちに勘六は相手の隙を見出して一太刀浴びせかけると、こは協はじと思つたか、一歩〳〵後退する。それを踏込み〳〵突進んで泉水の傍まで行くと、何うしたはずみか、足を滑らしてドブンと水中へ落ちてしまつた。

「しまつたッ！」

さうんで勘六がさまで深くない水中で身構へをしようとすると、敵は一目散に逃げ出して行つた。

そのおかげで生命は助かつたのである。

× × × ×

彌兵衞、喜兵衞、岡野、横川、貝賀の五人は、隣家の本多邸に近い新門を守つて、脫出者を見張つてゐると、室内戰の激甚なる頃、果して敵は此處を血路として押して來た。こゝを守る人々は大抵槍の使手だつたので、いづれも槍を執つて敵と渡合つた。殊に岡野金右衞門は十文字槍の使手だつた

ので、その槍先には手もなく一人の敵が突き伏せられてしまつた。この間に横川勘平は大刀を揮つて縱横無盡に敵に當つたので、その身にも創を負うた。それがため敵は再び室内へ逃込んでしまつた。

それから五人は長屋の前を巡廻して、

「出會ふ者は疾く出會へ」

と、呼ばはつて歩いたが、誰一人として出會ふ者もなく、いづれも屏息してゐた。

裏門へ

乙隊の情況——

吉田忠左衞門が主税の後見をして、甲隊が表門へ向ふと同時に裏門へと押寄せた。この方面へ廻る南角には吉良邸の辻番所があつて其處に足輕が番をしてゐた。夜陰に乘じて異樣な一團が押寄せて來たと見てとつた番人は、おつ取り棒で一同の前へ立塞がつた。

「ソレッ！」と、いふや否や寄つて集かつて番人を高手小手に縛り上げてしまつた。

「聲を立てるとこれであるぞ！」

白刃を差しつけながら切りかねまじき氣勢を示した。

そしてそのまゝ裏門へ向つた。

「打破れッ！」

命令と共に杉野十平次、三村次郎左衞門の兩人が、大槌を揮つて擊てば、門扉はめり〳〵と音して碎かれてしまつた。一同はどつと雪崩れ込んだ。そしてそれ〴〵部署に就いた。卽ち、

磯貝十郎左衞門、堀部安兵衞、倉橋傳介、杉野十平次、赤埴源藏、菅谷半之亟、大石瀨左衞門、村松三太夫、三村次郎左衞門、寺坂吉右衞門は第一隊となり、

大石主税、潮田又之亟、中村勘助、奥田貞右衞門、間瀨孫九郎、千馬三郎兵衞、茅野和助、間新六、木村岡右衞門、不破數右衞門、前原伊助もまた第二隊となり、

吉田忠左衞門、小野寺十内、間喜兵衞の三人は門内にあつて長屋の監視と脫出者を見張つてゐた。

第一隊が玄關を破つて館内にと押込んで、四邊の樣子を窺ひながら奥へ〳〵と進んで行つた。その時十郎左衞門は勝手邊から逃げ出さんとする一人の家人を捕へた。

「どうぞ命ばかり……」

家人は震い上つて哀願した。

「よしッ！　命は助け遣す、その代り蠟燭の在所をいへ」
「蠟燭ならば此處に」
家人は一束の蠟燭を取出した。
十郎左衞門はそれ等の蠟燭に火を點じて彼方此方の室内に立て並べた。
そればかりでなく、敵の隱れ場所をなくするために、室といふ室の戸、障子、襖、唐紙などを全部打拂つてしまつた。それがために灯がぢつと通つて一同の活動に非常に便宜を與へた。
第二隊も主税を先頭に西口の玄關から押入つたが、いつか館内に於て兩部隊が合隊してしまつた。一同は現はれる敵を片つ端から片付けて前進した。殊に不破數右衞門の働きは目ざましいもので、忽ち三四人の敵を切倒してしまつて前進せんとした時、一人の手強い敵が現はれて立向つて來た。數右衞門は更にひるむ樣子もなく、その敵を相手に火花を散らして切り結んだ。が、相手もなかなかさるもので、やゝともすれば數右衞門の方が受太刀にならうとする。
それがために數右衞門の羽織、小袖などの布片が切られて、ぺらぺらにちぎれ下がつた。しかし、創一つ負はない。それに引代へ敵は身を固めてはゐないから、はや數ケ所の傷を負うてしまつた。
「鋭ッ！」

最後の一撃を眉間に受けて、敵は其場に堂と倒れてしまつた。數右衞門は刀を拭うてよく見ると、刀はまるで鋸の如くになつてゐたのには自分ながら驚かされた。

× × × ×

一同は敵を片つ端から打止めながらだん〳〵奥へと突進した。
その時、裏門へ二人の敵が現はれた。
「御參なれ」
十内は先に進んだ一人と渡合ひ、忠左衞門は他の一人を相手に槍を揮つて突つかけて、二人共倒してしまつた。
「一體隱居といふものは館の奥に住むものだが、上野介の居間もそれに相違あるまい。一つ見廻つて調べて見ようではござらぬか」
そこで喜兵衞一人を見張に置いて、忠左衞門と十内とは別れ〳〵になつて、館の周圍を見廻つた。
十内は館の裏口へと廻つた。ここは隣家の土屋邸と接近してゐるので、土屋邸では萬一を心配して、高提灯を立て、嚴重に警備してゐる樣子が塀越しに見える。で、十内は此方から挨拶の聲をかけた。

「我々は赤穂の浪人共で、亡主の復讐をせんがために、今夕當邸へ推參いたしたものでござりまする。決して御館には御迷惑は相掛けませぬ。何卒御見逃がしの程を御願申上げまする」

これは一つには隣家の誼みで、援兵でも差し向けられてはならぬといふ懸念もあつたから、世故にたけた十内はかういつて一應の挨拶をして置いたのである。

上野介の首級

やがて甲隊乙隊は合隊した。

「上野介殿の在所は？」

「上野介殿は？」

顔を合はした時、兩方の部隊から同じやうなことをいひ合つた。しかし、双方共同じ答へであつた。

「皆目分り申さぬ」

その中に拔穴らしい穴を發見した。一同はその穴の周圍を取卷いて上から中を覗き込んだ。

「この穴はかね〳〵聞いてゐた拔穴かも知れぬ」

誰かゞいつた。

「左樣かも知れぬ」

誰かゞ合槌を打つた。

「中へ入つて調べて御覽じろ」

しかし、誰も氣味惡るさうにして進んで入らうともしない。どんな仕掛けがこの穴の中にしてあるかも知れぬと思つたからだ。生命を投出してかゝつてる人々にして尙ほこの氣臆れがある。

その時、大石主税がづか〳〵と進み出ていつた。

「その役目こそ私如き年少者に似つかはしい」

さういふや否や身を躍らせて穴の中へ飛込んで行つた。これに勵まされて人々はつゞいて入つて行つた。

「何物もござらぬ。闇だけでござる」

主税を始め人々は蜘蛛巢だらけになつて這ひ上つて來た。

それから一同は尙も奥へ進んだ。この時はもはや刄向つて來る敵の影だになく、館の内外共に暴風雨の後の靜寂さで、徒に此處彼處に慘澹たる光景を呈してゐるばかりだつた。先刻十郎左衞門が立

並べた蠟燭の灯は、未だに燃えつきずに風にゆらめいてちら〳〵してゐるのも何となう佗しかつた。

その中の一團は廊下を傳うて離室と思はれる部屋の前に立つた。

「これが上野介殿の居間かも知れぬ」

で、足音を窃み、息を殺して内部の様子を窺つて見たが、更に人のゐる氣勢もしない。しかし、用心をしながらソツと入口の襖を開けて内部を覗いてみた。何等人影もない。

一同は土足の儘づか〳〵と部室の中へ入つて行つた。寢床が敷き放しになつてゐて、枕元には圓行燈の灯が心もとなく淡く點つてゐた。誰かゞ念のため蒲團の中へ手を差入れて見た。

「未だ溫味がござる。」

と同時に叫び聲を擧げた。

「偖ては逃げられたか！」

一同の眼は失望に輝いた。

「溫味が殘つてゐる上は未だ遠くへは行くまい、ソレ家搜しせい」.

このことを他の黨員にも告げたから、全員は手を分けて、館内殘るところなく家搜がしをした。が、かいくれ發見することが出來なかつた。

その中に東が白みかかつて來た。

しかし、矢張り無效だつた。人々の顏には焦燥の色が上り、やがて悲憤の色と變つた。

「これほどまでに家搜ししても見出さぬ以上は、取逃がしたものに相違ござるまい。我々の武運ももうこれ限り。この上は邸に火をかけて、腹搔き切つて相果てる外はござらぬ」

いづれもあり〳〵と絶望の色を浮べて涙を呑んで首垂れた。

その時、吉田忠左衞門は一同を勵ましながらいつた。

「腑甲斐なきことをいはれるな。敵はたしかにこの邸内に隱れて居ると存ずる。今一度搜がした上のことにせられい。未だ早まる場合ではござらぬ。」

搜査は再び始まつた。此度はいづれも聲を呑み、足音を忍ばせて館内から、邸内まで殘る所もなく搜がし廻つた。

吉田忠左衞門が臺所へ出て行過ぎようとした時である。傍の物置部屋の中と思はれるところからボソ〳〵と人の私語が洩れて來た。

「おかしいぞ！」

忠左衞門はそのまゝ其處に立ちつくして息を呑んで待つてゐた。が、矢張り何やらその私語がつゞ

いてゐる。そこで物置の入口に近寄つて見ると、錠がかかつて居る。ハテな、おかしなことがあればあるものだ。さう思つて入口の板戸に耳を寄せて忍びぎゝをしてゐると、その私語は正しくこの物置の内部から洩れて來ることが分つた。

「確かにそれに違ない、この中だ！」

忠左衛門は呼笛を高く鳴らした。

「何事でござる」

「敵は正しくこの中と定まつたり」

忠左衛門は物置を指した。

「ソレッ！」

と、いふや否や大槌を持つて入口の板戸は手もなく破られてしまつた。

「ヤッ、敵らしい者がゐるぞ」

内部を覗いてゐた誰かゞ叫んだ。

「打留めろッ！」

二三人がどか〳〵と入らうとすると、奥の方から木炭や薪類を頻に投げ出して來た。それと同時に一人の男が内部から打つて出て來た。三村次郎左衛門がこれと渡合つてゐたが、間もなく敵は切り倒された。と、また一人躍り出て來たが、直ぐに打ち取られてしまつた。

「未だ一人ゐるぞ、ソレッ！」

といふと、最後の一人が小刀を引抜いて身構へした。しかし、隙もあらば何んとかして逃出さうとする風だつた。それを見た間十次郎は槍を取つて走り寄りざま一突きについた。と同時に武林唯七は躍りかゝつて肩先から一刀の下に切下げた。敵は其場に倒れた。

「上野介かも知れぬ」

人々は氣息奄々たる敵を廣場へ引き出して見分した。

「貴殿は何と仰せられる？」

「何方にてござる？」

交る〳〵問うたが一言も答へない。

しかし、品のある老人で、白無垢の小袖を身につけてゐるところを見れば、この老人は普通人ではないことが分つた。

そこで檢査することになつた。

まづ額の傷痕を檢べて見た、が、ここには傷痕が見出されなかつた。

「それでは肩を」

これは内匠頭に刃傷の際に背後から切付けられたものである。

と、紛ふ方なき刀痕があり〳〵と殘つてゐた。人々の眼は喜びに輝いた。

「あッ、これこそ亡君が御切付なされた傷痕だ！」

今更の如く人々は感極まつて號泣した。老人も若人も我を忘れて聲を立て、喜び泣きに泣いた。

この時、内藏助が前に進み出て、佩刀をすらりと拔いて、まだ〳〵ひく〳〵してゐる上野介の喉元目がけて止めの一刀を差し貫いた。そして刀を靜かにおさめながら、間十次郎を招いて、

「初槍をつけたのは貴殿であるから、上野介殿の首級を揚げられい」

と、指命した。

「身にあまる面目でござりまする」

十次郎は刀を拔いて上野介義央の首を切り落して、内藏助の方へ面を差向けて實驗に供した。

内藏助は軍麾を取つて三度これを揮つて戰勝の式を擧げると同時に、鬨の聲は一時に堂と起つた。その聲は漸く朝になつた天地に、喜悅の波となつて擴がつて行つた。

「しかし、今一應たしかめる必要があらう、生捕の者共に見せて實驗を得ては」

誰かゞいひ出した。

「それが宜しからう。念には念を入れよといふ諺もござれば」

たしかにこの首級は上野介のものに相違ないと思ひながらも、未だ何んとなく不安なところから誰かゞさういつたのである。

そこで先刻縛つて置いた番人共を伴れて來て首級を見せて

「この御人は當家の御隱居に相違あるまい」

と尋ねると、いづれも恐る〳〵眺めて吃驚して、

「全く相違ございませぬ」

と答へた。

「然らば其方共は許して遣す」

縄を解いて番卒共を放してやつた。

それから一黨は義周を討取らんとして、今一度邸内を捜がし廻つたが、何處にも姿を發見することが出來なかつた。

「目指す上野介殿の首級を揚げた上は、子息までも討つには當るまい」

内藏助の言葉に人々は捜すのを斷念した。

銅鑼は鳴り渡つた。集まれの命令である。人々は裏門のところへ集まつてきた。そして各自の部隊へ就く。堀部安兵衞は内藏助の命を受けて、一黨の姓名簿を讀上げて、一々指名點呼を行つた。そしてその死傷者を檢べたが、原、神崎、近松の三人が打撲傷を受けたのと、横川が全創を蒙つたゞけであつた。

それから一同は今一度館の内外を廻つて、一黨は隊伍を整へて少し來た時に、いづれも急に氣の弛みが出て、ひどく疲勞を覺えた。と誰かゞ、

「この邊にて一杯祝杯を擧げようではござらぬか」

と、いひ出した。

「宜しからう」

一同は口々にいつた。

そこで暫時休息は與へられた。と、氣早の連中は隊列から飛び出して行つて附近の酒屋へ馳込んで行つた。酒屋は今やつと戸を明けて、これから店を開かうといふところだつた。

「酒をくれ」

酒屋の主人はびつくりした。人々は手に〳〵槍、薙刀などを携げて、全身血汐に染まつてゐる樣を見た主人は、斯樣な人々に酒を賣つたなら、如何なる後難があるかも知れぬと思つたので、

「合憎居酒は市中の法度でござりますれば、何卒御免下さりませ」

と、手を合はさんばかりにして哀願した。

こをを聞くと大高源吾は、

「今吾々は天下の御法度さへ破つて來た者共である。市中の法度ぐらゐ何であらう」

と、カラ〳〵と笑ひながら懷中を探つて金子二兩の一封を投出した。その上書に

「元祿十五年十二月十四日淺野内匠頭家來大高源吾忠雄討死。死骸取捨候方へ酒代」

と記してあつた。

「斯樣な大金を」

主人が眼を白黑してゐる間に、

「ソレ運び出せ」

と、いふと同時に、一樽の菰被を往來へ舁ぎ出した。待ちかねた連中は槍の石突を持つて鏡を破つた。なみ〳〵と湛へられた黃金水の得もいはれぬ香りは、人々の鼻をつんとついた。店に有合ふ桝、茶碗類を取つて來て人々は、

「甘露々々」

と、舌鼓を打つた。

さすがの上戸連も疲勞の後の酒だつたので、いづれも早く上機嫌になつてしまつた。そしてその意氣は當るべからざるものがあつた。大高子葉（源吾）は、

「日の息や忽ち碎くあつ氷」

と卽吟すれば、富森春帆（助右衞門）は、

「飛びこんで手にもたまらぬ霰かな」

と、今度は子葉は

「山を拔く力も折れて松の雪」

とやつた、これにつゞいて春帆は、

「寒鳥の身はむしらるゝ行衞かな」

とやつてのけた。

かうして人々の上機嫌のところへやがて集まれの命令があつた。で、人々は元の場所へ馳け戻つて隊列を整へた。そして最初からの豫定通り回向院へと向つた。

その途中

一黨は回向院の門前に來た。が、まだ門は開いてゐなかつた。そこではげしく門を叩いて、

「淺野内匠頭の家來共、唯今亡主の怨敵吉良殿を討取つて引揚げるとこころでござる。暫時御寺内を拜借して休息いたし度うござる」

と、大聲に呼ばはつた。

これを聞いた住職は、門番に命じて
「折角の御申聞けながらお貸し申されませぬ」
と門を閉めたまゝ内部から答へた。
「左樣なれば仕方もない」
それで一同は暫く門前に立ちつくして、上杉勢が押寄せて來はせぬかと待つてゐたが、攻めて來る氣勢もなかつたので、再び隊伍を整へて泉岳寺へ向つた。
眞先には槍を提げた義徒二人、その後には上野介の首級を白無垢の小袖に包んだのを、槍の柄に結びつけて、これを高く捧げ、數人の義徒がそれを護衛した。次には內藏助が只一人、悠然として步行する。次にはまた一黨。負傷者や老人は途中で駕を雇つてこれに乘せる。
「赤穗の浪人が吉良上野介の邸へ討入つて首級を擧げて、今泉岳寺へ引揚げるところださうな」
この噂は電光の如く市中へひろがつた。それで人々は先を爭つて往來へ集まつて、その引揚げの光景を眺めようとした。途中は人垣で黑山のやうであつた。
今日は十五日で、大小名の登城日である。それで一行はなるべくその通行に會はないやうにと道を選んで、回向院前を出て、本庄一ツ目の河岸から深川に入つて、御船藏後通を過ぎ、隅田川に沿うて、

永代橋を渡り、靈岸島から稻荷橋、築地鐵砲洲へ出て、淺野舊邸の前を通り、汐留橋を渡つて芝區に入り、日比谷三丁目裏町にある仙臺邸の前へ來かかつた。
と、同邸の辻番の足輕共が、この異樣なる一行を見るやその前に立塞つて
「御通行は相成りませぬ」
といつた。
これを聞いた若手の連中はムツとして
「何に、通行ならぬと？」
と、氣色ばんで足輕共を蹴散らさん勢ひを示した。
內藏助はこれを抑へて
「吾々は淺野內匠頭家來、只今亡主の怨敵吉良殿を討取つて引揚げの途中でござる。決して御迷惑は相懸けませぬ、このまゝお通し下さるやう」
と、丁寧に挨拶した。
しかし、事柄が事柄なので、足輕共ではどうしてよいか判斷がつきかねたと見えて
「暫時お待ち下さい」

と、門内へ馳込んで行つた。

暫くすると、肩衣をつけた氣品のある侍が現はれて、

「御一擧の趣只今承り、御忠節の段感激に堪へませぬ。唯御公儀の手前、一應は御停め申したる次第、何卒悪しからず、そのまゝ御通りを」

と、慇懃に挨拶した。

そこで一行は通行した。それから會津邸でも同じやうなことをやられた。が、これも無事に通れた。それから金杉橋から、將監橋を過ぎ、高輪の泉岳寺へと到着した。

泉岳寺に入る

槍、薙刀、弓、野太刀などを提げて、身體にはいづれも血汐を浴びながら一黨は隊伍を整へて山門内へと入つて來た。その後から途中から追々と加はつて來た群集は、先を爭つてつゞいて門内に押入らうとしてこゝで烈しく揉合つてゐる。

内藏助は寺僧に向つて

「我々共は昨夜亡君の讐吉良殿を討つて、首級を申受け、亡君の御墓前にこれを供へて御遺恨を慰めまつらんためにこゝまで引揚げて參つたものでござる。御當山には御迷惑はかけませぬ故、奉告を終るまで何卒山門を閉ぢ、群集を御停め下さるやう御願ひ申す」

と、頼入つた。

と、一黨のたゞならぬ樣子を見てびつくりした寺僧は、

「暫くお待ち下さい」

といつて、方丈へ馳け込んだ。

當時の住職は酬山長息和尚で、寺僧は右の趣を告げると、長息和尚も非常に迷惑をして、一黨の入門を斷らうとする。

それをきいた承天則知といふ一英僧がそれを遮つて

「當山は淺野家御一門の御菩提所ではござりませぬか。その淺野家の遺臣の方々が亡君の讐を討つて御墓前に奉告しようとて來られたものを、無下に斷るといふ法はありませぬ。疾く〳〵御承引あつて宜しからう」

と、色をなして迫つた。

「てはよきやうに」
長息も不承〳〵にさういつて奥へ引込んでしまつた。
で、則知は早速に一黨の傍まで出て來て
「方々の御忠誠、感懷の外はございませぬ。亡君御尊靈も定めし御滿足のことと思ひまする。山門の閉鎖は心得ました。何卒御心置なく御奉告なさりまするやうに」
と、挨拶した。
それから則知は一山の衆徒を集めて、押入らうとひしめき合つてゐる群集を門外へ追ひ出して、扉を堅く閉めてしまつた。

奉告祭

門内は靜になつた。
内藏助は、上野介の首級の包を解かせて、首を清水で洗ひ淨め、それを三方に載せて、「冷光院殿前少府朝散太夫吹毛玄利大居士」の墓前へ恭しく供へた。香爐からは柴煙が靜かに立昇つて、輝き渡る日光の中へ消えて行つた。
水で手を淨め、口を嗽いだ一黨は、墓前に集まつて、雪の上へ跪いて頭を垂れた。内藏助は徐々に進んで燒香をなし、禮拜を終ると、更に一階段を上つて懷中から短刀を取出し、その鞘を拂つて柄を墓石の方に向け、鋒先を首級の方へ向けて踏石の上に置いた。それから數歩を退いて再び墓前に額づいた。
「我等舊臣四十七人、只今君の讐敵吉良上野介殿を討取つて、その首級を擧げて君の御墓前へ奉告するものでございまする。何卒これにて御鬱憤を晴れまするやうに偏に御願ひ申上げまする。やがて我等一同も泉下に君の御跡を御慕ひ申すでございませう」
と、奉告した。
一同は感極まつていづれも暗涙を咽んでゐた。歔欷の聲がつゞいてこの靜寂境を濕つぽくした。
やがて内藏助は墓前に進んで短刀を取上げ、上野介の首級を目がけて、その首上に力を加へた。これは亡君に代つて讐を討つといふ意味である。それが終ると燒香をして退く。それから内藏助自らが燒香順番を告げる。
「敵への一番槍は間十次郎殿でござれば、十次郎殿燒香せられい、その次の二番太刀は武林唯七殿

でござれば、唯七殿の番でござる。以下老人を先にせられて、若人はその後から隨意に燒香せられるやうに」

間十次郎・武林唯七の兩人は再三これを辭退したが、一同にすゝめられて面目を施して燒香をした。その後から十餘人が代る〳〵燒香をした。

これで奉告祭の式は終つた。

流言

一黨は則知の案内によつて墓所から中堂へと移つた。その時、内藏助は則知に向つていつた。

「亡君の怨敵を仆し、奉告祭を終つた上は、我等はもはや何等心殘りもござりませぬ。この上は只公儀の御沙汰を待つばかり。それで今引揚げの途中から吉田忠左衞門、富森助右衞門の兩人を、大目附仙石伯耆守殿邸へ遣はし、昨夜の始末を上申させてござれば、その御指揮を此處にて待ちたう存ずる。暫時休憩を許されたい」

「御遠慮なくゆる〳〵と御休息なされまするやう」

則知は卽答して

「定めし御空腹のこと、思ひまする。只今白粥を炊かせて居りますれば、差上げるでござりませう」

やがて一同の前へ白粥が運ばれた。昨夜からの緊張でお腹のことなどすつかり忘れてゐた一同は、溫かくおいしさうな白粥を見ると、急にひどく空腹が感じられてきた。

「これは〳〵、お心づくしの程を有難く感謝いたしまする」

内藏助は一同に代つて挨拶をした。

「葷酒は宗規の禁でござりますれど、今日は特別の場合、かゝはることもござらねば、磐若湯を差上げませう」

さういつて則知は何斗かの酒を溫めて膳部の間へ運ばせた。

「何から何までのお心づくし、忝うござる」

内藏助は重ねて謝した。

「これは結構」

「何よりの好物」

上戸連は遠慮なく杯を取上げて互に酌交はした。下戸連は椀を引寄せて思ふ存分腹を滿たした。

それで一黨はすつかり元氣を回復した。そして彼方でも此方でも、昨夜の手柄話が賑かに取交はされた。

「萬一上杉樣からの討手が寄せた時、此處で戰つては第一お寺に迷惑をかけることになる。その際は此方から出迎へて往還で決戰すること、いたさう。それにはもはや山門をお閉め置き下さる必要もござらねば、何卒お開き下されい」

内藏助は微薫を帶びた顏を擧げていつた。

「それが宜しからう。何卒山門をお開き下されい。この勢ひを以て戰はゞ上杉勢何程のことやあらんだ」

一同は昂然としてどよめいた。

「昨夜の戰はあまりに飽氣なく終り申して拙者達ちと物足り申さぬ。上杉勢の寄するは望むところ」

中にはさういふ者もあつた。

その時、内藏助は筆を執つてさらさらと一首を認めた。

あら樂し思ひは晴るゝ身はすつる浮世の月にかゝる雲なし

その後につゞいて間野鈍右衛門も一句やつた。

その句雪の淺茅の野梅かな

いつか正午になつた。

「上杉家からの討手の衆が既に途中まで向はれたとのことにござりまする」

と、一寺僧が慌しく駈込んで來て知らせた。

「偖てはいよ〳〵向つたか！」

一黨は思はず刀を取つて立上つた。そして山門を指して今にも駈出さん勢を示した。

それを見た主税は笑ひながら一同を押止めていつた。

「それは必ず流言でござらう。何んとなれば、もし上杉勢が向ふなれば、何を好んでかゝる白晝を擇ばれませうや。昨夜の間か、おそくとも今朝に攻寄するべき筈でござる」

その後につゞいて内藏助は首領らしい意見を述べた。

「拙者も左樣に考へる。さりながら萬一のことも考へて置かねばなりませぬ。方々用意だけはして置かれるやう」

そこで一同は身ごしらへをして、何時とても打つて出られるだけの用意をして、今か今かと上杉勢を待受けてゐたが、何刻經つても遂に押し寄せては來なかつた。

× × × ×

吉良邸討入の報が十五日の朝になつて柳營へ急告された。この急報を得て柳營で第一に懸念されたのは上杉家である。萬一同家から追擊の兵を繰出して一黨に向ふやなうことがあつては、それこそ由々しき大問題であるとして、早速に上杉邸へ上使を差向けた。

その時は上杉邸でも吉良家の凶變を聞いて上を下への大騒動をやつてゐる最中であつた。

「偖ては赤穗浪人に出し抜かれたか？ 父を討たせて、そのまゝでは武門の面目が立たぬ。在府の人數を繰り出して疾く〳〵泉岳寺へ追ひ向ふやう」

上野介の實子である上杉家の當守彈正大弼綱憲朝臣は、病床の上に立上つて、齒がみをして口惜しがつた。

すると家老宮部又四郎は進み出て

「仰せではござりますけれど、吉良殿と御當家とは御親子の間柄とは申せ、かゝる太平の御代に、將軍家御膝下に於て干戈を交へまする時は、不識庵公以來の御名家も、もはやこれまでゝござりまする。我等御當家重代の臣として、御出兵には御諫言を申上げねばなりませぬ」

と、まかり間違へば腹も強切らんばかりの決心を眉宇に現はして說きすゝめた。

しかし、綱憲朝臣はなか〳〵これを肯入れなかつた。出兵を強ひてやまなかつた。そこで出兵不出兵の會議が開かれた。

その最中に、畠山式部大輔が上使として來邸して

「吉良家不慮の變に就き、家中萬一の心得ちがひなきやうに、よく〳〵申付けらるべし」

と、命を傳へた。

かうなつては最早仕方がない。

「御上意の程畏まつてござりまする」

と、お受けするより外はなかつた。

それで一黨が泉岳寺に於て、待てど暮せど、上杉家の兵が討つて來なかつたのである。

一通の書狀

赤穗浪人が結束して吉良邸へ討入つて、上野介の首級を擧げて引揚げたといふ報を早くも耳にされた故内匠頭の未亡人瑤泉院は、當時鐵砲洲の淺野邸を立退後、ずつと青山にある淺野土佐守長澄邸

へ引取られて居られたが
「偖てはいよ〳〵我殿の御無念を晴らしてくれたか、これで我殿も泉下に於て定めし御滿足のこと、思はれまする」
と、一人心の中で打喜ばれて、佛間に入られて御燈明を上げ、香を燃いて「冷光院殿前小府朝散吹毛玄利大居士」の位牌の前に額づいて合掌して居られる時であつた。
一人の家來が一通の書狀を持つて入つて來て
「只今使者の參りまして、これをあなた樣に差上げてくれるやうにとのことでござりました」
と、書狀を差出した。
「してその使者はまだ待たしてありまするか、何方からと申して居りました」
瑤泉院は靜に振向いていはれた。
「京都紫野の瑞光院から參つたと申して居りました。年の頃三十七八かと思はれる男で、遠くから參つたものらしく、ちやんと長道中の身ごしらへをして居りました。只おかしなことは、遙々京都から參つたと申しながら、只今の書狀をお手許へ差上げてくれゝばそれでよいと申して、どん〳〵引き返して行つてしまひましてござりまする。何か御返事もと思ひましたから呼止めましたが、耳にも

入れずに驅去つてしまひましてござりまする」
家來の者が合點が行かないやうに更に小首を傾けながら繰り返した。
「左樣でありましたか、それはまた氣早な衆でござりますること。大方返事はいらぬものでござりませう」
さういつて瑤泉院は今一度禮拜してから、自分の居間へ引取られた。そして何事ならんと胸に波打たせながら、手早く書狀を切つて中を改められた。
それは內藏助からの書狀であつた。それには一擧の顚末を述べ、例の主家再興費に當てる一萬兩の金の使途に對する明細な報告書を添へ、小額なれど殘金さへ封入してあつた。瑤泉院はつく〴〵それを眺めて居られたが
「我殿のため斯樣までに辛苦艱難してくれやつたか……」
と、そゞろに暫しの間は感謝の涙を流されるのであつた。
この朝、一黨引揚げの途中から寺坂吉右衞門の姿はいつの間にか見えなくなつて居た。それが泉岳寺へ引揚げるまでは何人にも氣がつかなかつた。瑤泉院へ使者に向つたのも、恐らく吉右衞門であつたであらう。

自訴

一黨の途中から別れた吉田忠左衞門、富森助右衞門の兩人は、愛宕下町にある大目附仙石伯耆守久尙の門前へと立つた。兩人共手槍を杖にしてゐたが、それを門前に立てかけてから、內へ入つて案內を乞うた。

「我々は赤穗の浪人吉田忠左衞門富森助右衞門と申す者、同志四十餘名と共に、昨夜吉良上野介殿邸へ討入つて、亡主の怨敵上野介の首級を擧げ、只今泉岳寺へ引揚げ、御公裁を仰がんがために吾等兩人參上いたしてござりまする。委細は伯耆守殿に拜謁の上、直々に申上げたう存じまする。何卒宜しくお取次を」

取次の侍が兩人の物々しい樣子を見て、これは一大事であると急いで、このことを伯耆守へ申上げた。

「如何いたしませうか」

「直々會ふから通しておけ」

取次の侍は再び現はれて

「お會ひなされまするから何卒お通りを」

と、いつた。

兩人は兩刀を脫して取次の侍に預け、廣間へと案內して貰つた。

間もなく伯耆守は入つて來られた。

兩人は謹んで挨拶をしたる後、討入りまでの顚末を詳しく述べて

「もはや本懷を達しましたる上は一同切腹仕り相果てまする儀にござりますれど、御膝下を騷がし、且つは當家御歷々の方を私に討取りましたる段、公儀に對して恐入つたる次第にござりますれば、一同亡君の墓前に集まり、御公裁を仰がんために自訴に及びましてござりまする。委細はこの口上書にて御賢察を願ひ上げまする」

吉田忠左衞門は懷中から例の口上書を取出して差出した。

伯耆守はそれを手にして眼を通した後、

「一黨の人數はこれ限りに止まるか」

と訊ねた。

「御意の通り、それ限りにござりまする」
「これ等の人々はいづれも泉岳寺に集まつて居るか」
「御意にござりまする。一人も離散仕らず、相控へて居りまする」
「それは神妙。これより登城して逐一言上する。その間ゆる〳〵休息して御沙汰を待たれい」
さういつて伯耆守は立上つて出て行かうとされるので、忠左衛門は慌てゝ
「有難き御意、感謝の外はござりませぬ。なれど一同の者御沙汰如何を待佗びて居ようと存じますれば、我等兩名の中一名だけ泉岳寺へお返し下され度う願上げまする」
と、許可を乞うた。
「未だ訊ねたきことがある。兩人共、予が歸邸まで控へられい」
といひながら家人を呼んで
「兩人共さぞ空腹であらう。湯漬など取らせい」
と、命じて奥へはゐつてしまはれた。
家人は交る〳〵出て兩人をもてなした。兩人はこの手厚いもてなしに感激しながら、食膳に向つて箸を動かしてゐた。

「甚だ恐入りまするが、先刻御伺ひの節、門前に手槍を立てかけて置きましたれば、御取入れ下されますやう」
食事が終つた時頼んだ。
「承知いたしてござる」

× × × ×

仙石伯耆守は慌しく登城した。と、同時に奉書は老中及若年寄の許に飛んだ。この俄かの招集書によつて老中阿部豐後守正武、土屋相模守正直、稲葉丹後守正通を始めとして、いづれも取るものも取敢へずといつた風にして續々と登城した。稲垣對馬守重富の如きは馬を馳せての登城であつた。
これによつて見ても、如何にこの事件が天下の大事件であつたかゞ相像出來よう。
そして早速閣議は開かれた。伯耆守は召出されて逐一事情を聽き取られた。閣員は一黨の口上書を手から手へと傳へて通讀された。いづれも感嘆これを久しうした。中には感涙さへ湛へられた人もあつた。
そこへ社寺奉行阿部飛彈守は泉岳寺住職の訴出によつて登閣する。老中稲葉守の許へは吉良左兵衛から届出がある。

閣議の結果赤穂浪人共は今一應取調べ方を伯耆守に命ぜられる。それで伯耆守は早速歸邸して待たせてあつた兩人の訊問にかゝり、その調書を作つて再び上申される。一方吉良邸へは御目附阿部式部、杉田五左衞門に御徒目附四人、御小人目附六人を附して檢按に向はせられた。

吉良邸の檢按

吉良邸では御目附の檢按と聞いて家老齋藤宮内、左右田孫兵衞、岩瀨舍人等が恐る〳〵出迎へた。

「主人上野介の死骸檢視をするであらうから、その場所へ案内せられい」

家老達はびく〳〵もので、死骸の横はつてゐる物置小屋の前へ案内した。

首のない死骸は、左右の掌に各々一ヶ所の創、左の股に一ヶ所、右の膝頭に二ヶ所、肩に一ヶ所、そしてその傍には二尺三寸の無銘の一刀が血に染まつて落ちてゐた。その柄には切込みが一ヶ所あつたが、これは劇しく戰つた樣を見せるために後から創つけたものといはれる。

次に左兵衞等周圍の檢按となつた。左兵衞は如何にも面目なげに出て來た。見ると、額を大袈裟に卷立て、背中も同樣にしてゐる。自分では額の創は三寸、背後は七寸、それで氣絕して不覺を取りたと申立てた。その際用ひた薙刀を示したが、柄の所に一個所切込みがあつた。これもごまかしの後の創である。口上書を徵されたので、次の通り書上げて差出した。

昨十四日夜八ツ半過ぎ上野介並拙者罷りあり候處へ、澤野内匠頭家來と名乘り大勢火事裝束の體に相見え押込み申候、表長屋の方は二ヶ所に梯子を掛け、裏門は打破り、大勢亂入いたし、その上弓、箭、鎗、長刀など持參、所々より切込申候、家來共防ぎ候へ共、彼者共兵具に身を固め參り候や、此方家來死人手負多くこれあり、亂入候者へは手を負はせ候ばかりにて討留め申さず候、拙者方へ切込申候に付、當番の家來傍に臥居候者共これを防ぎ、拙者も長刀にて防ぎ申候所、二ヶ所手を負ひ、眼に血入り氣遠くまかりなり、暫くあつて正氣付、上野介儀心もとなく存じ、居間へ罷り越し見候へば、もはや討れ申候、其後狼藉の者共引取り居申さず候

十二月十五日　　吉良左兵衞

次に家臣等の死傷の取調に移つた。

戰死者

小林平八郎（用人）　鳥居現右衞門（用人）
須藤與一右衞門（用人）　大須賀次郎右衞門（中小姓）

清水一學（中小姓）　齋藤清右衛門（中小姓）
新見彌七郎（中小姓）　小塚源次郎（中小姓）
左右田清八郎（中小姓）　鈴木源右衛門（祐筆）
小笠原長太郎（役人）　榊原平右衛門（役人）
鈴木松竹（坊主）　牧野春齋（坊主）
森半左衛門（足輕）

重傷者

宮石竹右衛門（用人）　齋藤十郎兵衛（執次役）
清水團右衛門（執次役）　宮石新兵衛（中小姓）
山吉新八郎（中小姓）　船松九兵衛（中小姓）
天野貞之丞（中小姓）　伊藤喜左衛門（中小姓）
松山與王右衛門（中小姓）　石川彦右衛門（中小姓）

輕傷者

齋藤宮内（家老）　左右田孫兵衛（家老）

岩瀬舍人（家老）　松原多仲（家老）
加藤太左衛門（役人）　杉山三左衛門（中小姓）
堀江勘左衛門（中小姓）　大河内六郎左衛門（足輕小頭）
岩田彌兵衛（足輕）　八太夫（仲間）
兵左衛門（駕舁）　吉右衛門（馬口執）

遁走者

杉山甚五左衛門　石原彌右衛門
榊原五郎右衛門　古澤善左衛門

そして無傷者は鵜谷平馬以下足輕、仲間小者等都合百四人であつた。高が一旗下の高家にしてこんなに多數の人々――上下合せて百四十八名がゐたなどは矢張り上杉家の後援があつたことは明である。しかるに一人として義徒を討取れなかつたことは返すゞも武門の名折れである。つまり義徒の三倍以上の人員を擁しながら、主人の首級まで擧げられたのは、三分の二の人々が出て戰はなかつたからで、從つて無傷者の多い理由である。

吉良邸上下の檢按はすんだ。序に一黨が棄て、行つた兵器什器を取調べられた。

と、討入りの際には必要で、引揚げにはいづれも不必要の梯子、大槌、鉞、弦の切れた弓、尖の折れ又は柄の折れた槍、折れた太刀などで、一物として必要な大切なものは置いてなかつた。それ等のものと玄關前に立てゝあつた「淺野内匠頭家來口上書」等が押收され、吉良家上下の口上書と共に老中の手許までまとめて差し出させた。

隣邸の口上書

つづいて隣邸の檢按に移つた。

最初に表門の向側にある旗下牧野長門邸が取調べられたが、當時主人長門は駿府在藩中だつたので、家來から次の口上書が提出された。

昨夜七ツ時前火事出來候、樣人聲仕り候に付、罷出見申し候へば吉良左兵衛藏屋敷の御内、聲高に聞え候へども、樣子曾て知れ申さず、門外に控罷在候處、その後何の騒しき體にも座なく候故そのままに仕置候。

十二月十五日　　牧野長門内

次に北隣の邸本多孫太郎もまた在國中だつたので留守居の家來から、口上書を差出した。

昨夜七ツ時前物騒しく候に付、まかり出候處、吉良左兵衛殿屋敷夥しき騒ぎ、火事出來の體に候へども、樣子一切知れ申さず、その内鳴りも靜まり申候。

十二月十五日　　茂木藤太夫
松平兵部大輔内本多孫太郎家來
眞柄勘太夫

兩家とも旨く責任を逃れた。それから土屋邸の取調となつた。主人土屋主税は最初から義徒に同情してゐたので、そこへ塀越しとは申せ一應の挨拶があつたので、むしろ旨く本望を達してくれゝばよいと内心思ひながら、主人の主税は床几を持出してそれに腰かけ、高張提灯を押立てゝ夜の明けるまで家臣を指揮してゐたのである。そして若しも吉良公子が塀を乗り越えて逃げ込んで來るやうなことがあれば、狼藉者として射落さうと待構へてゐたのである。それで次の口上書を認めて差出した。

昨夜七ツ時前吉良屋敷騒がしく候故、火事にて候也と存じ罷在候へば、喧嘩の體に相聞え候に付、家來共召連れ、境目までまかり出固め候てこれ有り候處、塀越しに聲もかけ、淺野内匠頭家來片岡源吾左衛門、原惣右衛門、小野寺十内と申者にて候、唯今主人の仇上野介殿を

討取り、本望を達し候と呼ばはり申候を塀越しに承り申候。夜明時分、裏門より人數五六十人程まかり出候やうに見え申候。尤も火事裝束の體に相見え申候。未だ闇く候てしかと確め申さず候。

十二月十五日

土屋主税

御預の命令

御目附阿部式部、杉田五左衞門の一行が取調を終つて歸城して、詳細に閣老へ報告をした。そこで老中一同は將軍の御前へ伺候して、討入りの顚末から一切の書類までも台覽に供して、親裁を仰いだ。内匠頭を大不敬罪に問はれた將軍綱吉は、今度は一黨討入の顚末を聞き、大義を宣明せる口上書を手にして眺めて居られたが、ひどく感激の面持ちで、

「この二年間に亙る彼等内匠頭の遺臣共の苦心は、さぞ辛かつたであらう」

と、いつてじつと視線を落された。

「天下に稀なる忠義の者共でござりまする。これは一味大名中に御預けの上、充分の御設備を遂げさせられて、御處分あつて然るべくと存じ奉ります。」

閣老はいづれも一黨に味方してさういつた。

將軍は首肯いて

「よきに計らへ」

と、申されて座を立たれた。

丁度この日は月の十五日だつたので、大樹家へ御禮のため在府の諸大小名が總登城をしてゐる時だつたが、老中の取計ひで側の口上書などは、諸大小名の手へそれからそれへと渡されて披見されたのである。諸大名はいづれもその忠節に感心し、感激のあまり落涙された人もあつた。

「御當代に於てかゝる忠義の士を出しましたる事は、いよ〳〵天下泰平の吉兆と存ずる」

老中阿部豐後守正武は憚るところもなく並居る諸大小名の前でいつてのけた。

「御意のとほりでござりまする」

英傑として聞えた老中の言葉だけに、諸大小名はさういつて同意を表せざるを得なかつた。然し、さう感じたことも、また事實であつたであらう。

將軍の言葉によつて閣議は開かれて、義徒の處分は次の通りに決定した。即ち

十七人……細川越中守綱利（肥後熊本の城主）
十　人……久松隱岐守定直（伊豫松山の城主）
十　人……毛利甲斐守綱元（長門長府の城主）
十　人……水野　監物忠元（三河岡崎の城主）

それ〴〵當分の間御預けといふことになつた。それで折柄登城中の細川、毛利、水野の三侯を呼出して

「淺野家の浪人を當分預るやう、人數は早速泉岳寺へ參つて引取るやうに」

と、命令された。

「畏まつてござりまする」

三侯はお受けをした。そして直に家來の者を本邸へ馳けさせてその準備に取りかゝせられた。

久松侯は當日は病氣不參だつたので奉書は傳達された。

それから更に閣老の列席へ、御目附水野小左衞門、鈴木源吾衞門の兩人を呼出し

「淺野家の浪人四十七人の者共は御詮議の間當分四家へ御預けの旨、泉岳寺へ參つて申渡すやう。その上一同を仙石伯耆守役宅へ護送し、一々名簿に照會してそれ〴〵引渡さるべし」

と、申付けられた。

兩御目附はその旨をお受けして詰所まで引退つて來たが、しかし、これは生命懸けの役目である。何となれば赤穗浪人が吉良上野介を打取つて立退いたとは、もはや市中にひろがつて誰一人として知らぬ者がない。だから如何に上命なればとて、代々弓矢の家柄である上杉家ではこれを默つて過すやうなことはあるまい。必ずや護送の途中を要擊するに違ひない。それこそは大變なことになる。

「左樣な場合には御上意のあるところを懇々と諭し、若し聞かずんばそれまでゞござる。浪人等と共に上杉勢に向ひ、花々しく戰うて討死し、公儀の面目を辱しめ奉らぬやう心掛けるより外はござらぬ、」

兩御目附は凄慘たる決心をした。そしてこの旨を同伴の御徒目附、御小人目附達にも申渡した。

このことがいつか閣老の耳に入つたから閣老も非常に心配した。それで更に會議の上、萬一左樣なことがあつては一大事、これは寧ろ一黨の者共を伯耆守役宅まで自身に出向かせ、その場合に於て上命を傳へた方がよい、といふことになつた。

それで水野鈴木の兩御目附は上命を帶して仙石邸へ出向くことになつた。そして泉岳寺の一黨へはこのことの通知のため、御從目附石川彌一右衞門、市野辨八郎、松永小八郎の三人が派遣された。

細川越中守

思ひは水野鈴木兩御目附と同じ細川越中守は、赤穗浪人御預けの御沙汰に接するや、若しも途中に於て上杉勢に襲撃されてはといふところから

「拙者受取りの爲出馬いたしたう存ずる、この儀御聞濟を願ひ置きまする」

と、その席で申出た。

關西の雄藩五十四萬石の太守自身の出馬は餘りにも業々しいと思つてか、これを聞いて閣老は

「御奉公の御心掛は感懷に堪へませぬが、他藩の振合ひもござれば、しかるべき御名代を御遣しなされますれば宜しからう」

と、告げられた。

越中守も閣老にさういはれて見れば、それ以上押すわけにもいかないので、家臣に

「堂々と遣れ！」

と、命令した。

で、家老三宅藤兵衛を隊長として、鎌田軍之助、堀内平八、平野九郎右衛門等と共に、七百五十餘人の士卒を從へ、格式ある士は騎馬にて、用意駕十七挺の外に五挺の駕を豫備に舁がせて愛宕下の仙石邸へ向つた。

× × × ×

出兵の一番早かつたのは岡崎五萬石の城主水野忠元の一手であつた。御沙汰を受けると、山田大右衛門、山内九郎右衛門等が同勢二百餘人を從へて直に泉岳寺の山門前へ進んで、廣場へ陣取つた。

その後から伊豫十五萬石の城主久松隱岐守の同勢三百餘人が、番頭奥平次郎太夫、佃九兵衛等に引率されて、同じく泉岳寺へ到着した。

そして兩藩の同勢は山門前の廣場にあつて、折柄の豪雨の中にひしめき合つてゐるところへ第二の御沙汰が達した。それで五百餘の兩藩の同勢は再び仙石邸へと馳せ合つたのである。

× × × ×

長府五萬石の城主毛利綱元の一手二百餘人は、田代要人、原山將監等に率ゐられて最初から仙石邸へ向つてゐた。

こゝに四藩の兵合して千五百人となり、仙石邸前はまるで戰場出陣の如き物々しい光景を呈した。

公命を待つ

一黨は終日泉岳寺にあつて御沙汰を待つてゐた。最初は昨夜の討入りの手柄話などに酒の力を藉りて盛んに氣焰を擧げてゐたが、それ等の話題もやがてつきてしまつて急に退屈が襲ひかゝつて來た。その上、それでもと思つて心構へし、身を固めて待つてゐたその甲斐もなく、夕方になつてもとうたう上杉勢が押し寄せて來る氣勢もないので、更にがつかりしてしまつた。しかも折惡しく午後になつて曇つてきた空合が、夕方には豪雨となつてしまつた。夕暗が刻々に迫る中を、物凄い音を立てゝ落ちて來る雨を見ると、一黨中の或る者は全く沈み切つて、もう一言も發しようとはしなかつた。

「退屈でたまらぬ」

「いつになつたら御沙汰があるのか」

「どうせない生命、此場で腹搔き切つて死なうではござらぬか、便々とかうして待つてゐても仕方がござるまい」

壯年の者の間からいろ〳〵と不平の聲が起りかけて來た。

「この世の思ひ出にどれ一眠りをやらう」

さういつてごろりと横になる者もあつた。

「武林、腕角力でもやらうか」

大高源吾はいつた。

「よからう」

武林唯七と大高源吾の二人は顏を眞赤にしながら渾身の力を入れて腕角力をやつてゐた。それを退屈まぎれに、他の者たちは周圍へ集まつて面白さうに見物してゐた。

その時である。石川、市野、松永の三御徒目附が到着した。そして一黨を廣間へ集めて

「大目附仙石伯耆守殿役宅へ出向くやうに」

との命令が口達された。

「畏まつてござりまする」

内藏助はお受けした。

そして一黨に出發の準備を命じた。丁度酉の下刻卽ち午後七時であつた。しかし、この豪雨と暗とに乘じて上杉勢が要擊せんとも限らないと思つたから、味方には昨夜のままの身ごしらへで出發する

と、いつてから〳〵と大笑した。

これを聞いた小坊主は眼に一杯涙をためたま、俯向いて、暫くは顔も擧げ得なかつた。

× × × ×

毎日室内にばかり引籠りがちで、運動といつては入浴することゝ、便所に立つ位が精々で、大抵は靜に座して居食ひしてゐるので二汁五菜の馳走がだん〳〵もたれ氣味になつて來た。かういふ濃味たつぷりな馳走にはもはやあき〳〵して來た。それで折を見てはそれとなく誰かが接待係の人々に諷示して見るのだが、どうもこちらの意味を察してはくれぬ。

それで一同はとう〳〵我慢がし切れなくなつて、或る日、

「この上は太夫の力を借りて申出て貰ふより外仕方がござるまい」

と、いふことになつて、それを内藏助に話すと、

「實は拙者も同樣でござる。早速申出て何んとかして貰ひませう」

と、心よく引受けてくれた。

と、其處へ一同へ一番親しんで何彼と世話をしてくれる堀内傳右衞門がやつて來た。

「堀内殿にはよいところへお出で下された。實は我々同志は永い間の浪人中、まづいものばかり食し

てをりましたので、御邸へ御預けとなつて以來毎日御馳走ぜめに遭つて、いづれももたれ氣味で閉口いたして居りまする。何卒いま少し雜なものを頂戴いたしたうござりまする」

傳右衞門は内藏助の申出でをきいて、

「如何にも御尤千萬、早速料理方へ申付けませう」

と、答へて、

「しかし汁數菜數は主人指圖でござれば、その數は減らす譯には參りませぬ」

「それならば數は只今頂戴のままとして、味噌汁などの類を頂けませぬか」

壯年連は臆面もなく註文した。

そこで傳右衞門は早速このことを料理人に申入れると、

「これはお上からの申付けにござりますれば粗末にすることはなりませぬ」

と、律儀一方の言葉で拒否されてしまつた。

× × × ×

一同は毎日御馳走攻めに會つて倦んじて居る時に、御預けになつた四日目に、

「今日は主人には少々存寄りのことがあつて精進をいたされますから、御一同にも精進料理を差上

やうに命じた。

それで一黨は、兜頭巾の忍びの緒をしめ、鎗、薙刀の鞘を拂ひ、方手は靫を負ひ、半弓を手挾み、老人と負傷者を駕に乗せて一隊の中央に護衛し、高輪海岸三田通りから西久保を過ぎて愛宕下へと向つた。

仙石邸へ到着すると、其處には千五百の四藩の受取勢が物々しく待構へてゐた。一黨はそれ等の同勢には眼もくれずに、肅々として門前へ達した。

すると二三人の侍が門際に控へてゐて一々姓名を讀み上げた。

「大石内藏助殿」

「拙者でござる」

さういつて内藏助以下四十餘人は此處で首實驗をされてから、門内へと通された。

玄關には御徒目附が控へてゐて、一黨の手から佩刀、懷中物、兜頭巾までも受取つて、一々札を附けて預つた。一黨は洗足して玄關へ上り、案内を受けて廣間へと通つた。そしていづれも神妙に控へて御沙汰の下るのを待ち受けてゐた。

人と人

やがて仙石伯耆守は、御目附、御徒目附の控へてゐる中を正面上座へと立現はれた。と、御徒目附は、

「大石内藏助」

と呼んで、一問一答をした。

「其方の年齢は？」

「四十四歳にござりまする」

「知行は？」

「千五百石にござりまする」

「役目は？」

「城代家老の榮職を頂戴して居りましてござりまする」

それから家族、親戚のことまで一々尋ねられた。内藏助は一々それに答へた。

以下の同志も同様であつた。それらはいづれも筆記された。

それが終ると伯耆守は厳かなる口調で

「公儀に於かせられて御詮議中、其方共はそれ〴〵四家へ御預けと相成るに就き、左様心得よ。いづれ追ての御沙汰があれば、それまで神妙に待つやう」

それから御徒目附によつて再び御預別書が讀上げられた。

大石内蔵助、吉田忠左衛門、原惣右衛門、片岡源吾右衛門、間瀬九太夫、小野寺十内、間喜兵衛、磯貝十郎左衛門、堀部彌兵衛、近松勘六、富森助右衛門、潮田又之亟、早水藤左衛門、赤埴源蔵、奥田孫太夫、矢田五郎左衛門、大石瀬左衛門

の十七人は細川越中守へ御預け。

大石主税、堀部安兵衛、中村勘助、菅谷半之亟、不破數右衛門、千馬三郎兵衛、木村岡右衛門、岡野金右衛門、貝賀彌左衛門、大高源吾

の十人は久松隱岐守へ御預け。

岡嶋八十右衛門、吉田澤右衛門、武林唯七、倉橋傳介、村松喜兵衛、杉野十平次、勝田新左衛門、前原伊助、間新六、小野寺幸右衛門

の十人は毛利甲斐守へ御預け。

間十次郎、奥田貞右衛門、矢頭右衛門七、村松三太夫、間瀬孫九郎、茅野和助、神崎與五郎、横川勘平、三村次郎左衛門、寺坂吉右衛門

の十人は水野監物へ御預け。

その時、伯耆守は

「この中に寺坂吉右衛門の見えぬのは如何いたした」

と、訊ねられた。

「一同吉良邸を引揚げ、泉岳寺へ向ふ途中から姿が見えなくなりましてござりまする。それが泉岳寺へ到着後相分つた次第」

内藏助はさういつた。

これに對して伯耆守は追求しようとはしなかつた。

これによつて察すると、寺坂吉右衛門は、内藏助の意を含められて瑤泉院を始め赤穂へ使ひされたものと思はれる。

× × × ×

これで終つた。が、伯耆守をはじめ、御目附御徒目附はなか〳〵席を立たうとはされなかつた。これは、恐らく今宵を限り、同志の者がもう永久に會へなくなるその心情を察して、ゆる〳〵と名殘りを惜しませるための寛大なる心遣ひであつたと思はれる。そして一黨に向つてもつと前へ進むやうにといはれた。それから内藏助に向つて

「これは職責以外の話であるが、此度の一擧について一同の振舞は如何にも沈着、よく本望を達せられて伯耆實に感じ入る」

と、述べられた。

「まことに恐れ入つたる御言葉、一同面目至極にござりまする」

内藏助は厚く感謝の意を表した。

それから伯耆守は、昨夜の討入り、一黨の働き振り、吉良邸の光景などを問はれた。これには内藏助、忠左衞門が交る〴〵答へた。

「いや、目のあたり見るやうである」

伯耆守はや、感懷を深くした後

「上野介は老人であれど、左兵衞は壯年のこと、定めし美事な働きであつたであらう」

と、尋ねられた。

内藏助と忠左衞門とは思はず顏を見合せて暫く躊躇してゐた。

「御意にござりまする。相應によく戰はれましてござりまする」

この言葉に伯耆守はじめ御目附、御徒目附は思はず苦笑せられた。

× × × × ×

一黨の名簿をくりひろげながら眺めてゐた御目附水野小左衞門は、ずつと一同を見廻しながら

「主税は何處に居られるか？」

と、きかれた。

「此處に控へて居りまする」

身長五尺七寸の一壯漢が答へた。

「あッ其方が主税か、當年十五歲とあるが左樣か？」

「御意の通りにござりまする」

「あのみやびらかな言葉つき、これまで當地にでも出て居られたか？」

内藏助は引取つて

「此度私出府いたしまするにつきまして、初めて御當地へ下りましてござりまする」
と答へた。
「なか〳〵の大兵であるから、見たところでは弱年とは思はれぬ。が、聲を聞けば如何にも若い。内藏助、其方はよい子息を持たれて滿足であらう」
滿座は思はずこの父子の顏を眺めやつて、そゞろに胸を塞がらせられた。

× × × × ×

「昨夜吉良の家人を捕へて、蠟燭まで取出させて點し列ねたといふ磯貝十郎左衞門はどの仁か？」
伯耆守はまたしても訊ねた。内藏助は後方を指して
「あれに控へて居りまするが當人でござりまする」
と答へた。
「左樣か、若い人にしては、時にとつての思ひつき、感心の至り」
伯耆守の言葉に、十郎左衞門は面目を施して、面を染めて俯向いた。
最後に水野小左衞門は
「内匠頭殿はよき家來を多く持たれて幸福である。かゝる家來を持たれた上は、如何なる御用をもつとめられるべきに、今更遺憾の次第である」
と、しみ〴〵といつて、自分にも胸が迫まるか、少時は首垂れたまゝでゐられた。
それをきくと一同の間にすゝり泣きの聲が聞こえた。内藏助もそつと目頭を押へた。

× × × × ×

時は經つてやがて亥の下刻即ち夜の十一時となつた。伯耆守は改めて内藏助に向ひ、
「一同を乘物にて送るのを異樣に感ぜられるか知らねど、手負の衆もあれば、老人もあり、且つは警固の都合もあれば左樣取極めた。遠慮なく乘つて參られよ」
と、いつて、更に細川家の家老を呼出して、
「普通の御預人とも違へば、萬事いたはり取らするやう。途中は十分注意をして、もし乘物の戸を開けたいと望む者があれば、望みにまかして苦しうない。」
と、訓令された。
「重ね〴〵の有難き御懇命、一同に代りまして厚く御禮を申上げまする」
内藏助は丁寧に挨拶した。
内藏助は座を立つた。その後につづいて細川家へ御預けの十六人も席を立つた。その後から各家の

御預けの人々もいづれも立つた。そしてこれがこの世の名殘かと、各自に眼と眼・顏と顏とを合はせて別れを惜んだ。

内藏助は廣間を出ようとした時、眼で合圖をして主税を側に呼んだ。主税は人々の間を通りぬけて父の側へやつて來た。

「其方ともこれが最後ぢや。かねぐ〜申付けおいた事、忘れてはなりませぬぞ！」

内藏助は嚴とした中にも慈愛のこもつた調子でいつて、いとほしさうに我が子の顏をじつと眺めた。

「父上、御心配下さいますな。決して忘却はいたしませぬ」

主税はさういつてこれも繁々と父の顏を眺め返した。

内藏助は莞爾として打頷いた。

「では……」

「父上にも御機嫌よう……」

父子は別れを告げた。

内藏助は一人内玄關から、他の十六人は玄關から、駕籠に乘り移つた。

その他の同志もいづれも玄關から駕籠に乘つて、御預けになる各家の藩士に護衛されながら、それぞれの江戸屋敷へと向つた。

細川家に於ける人々

細川越中守は、御沙汰を受けて下城後、高輪の本邸に在つて義徒の到着を今か〜と待受けられた。今日殿中に於て御沙汰を拜すると、御預の人々を受取るため自身出馬しようとまでいはれたゞけあつて、義徒に對する同情、熱心もまた非常なものであつた。それて家臣に命じて萬事手落のないやうに準備されてあつた。

「赤穗の人々はまだか？」

越中守は居間に在つて、家臣を呼んでは先刻から同じ言葉をまたしてもくり返されるのであつた。

「もう間もなく到着のことと思はれまする」

家臣はさう答へるより外仕方がなかつた。

「途中間違でもなければよいがと、それが氣にかゝる」

少し苛々しく越中守はいはれた。

「御意にござりまする。なれど普通のことは大丈夫かと愚案いたされまする」
「予も左樣に思ふが……今は何時であるか」
「丑の刻限に近うござりまする」
「おゝ、左樣か。左樣な遲い刻限に、この雨では定めし途中は難儀のことと思はれる」
越中守は、師走の寒空に、しかも豪雨の中を眞夜中に近い時刻に、駕に搖られながらやつて來る物佗びしい義徒の心を思ひ遣つての同情の言葉を發せられたのである。
「到着！」
そこへ到着を知らせて來たので、越中守は漸く安堵されたらしく、やがて家來達を從へて義徒の控へてゐる廣間へと臨まれた。
「此度の一擧、まことに神妙に思ふ。其方達に斯樣に多くの侍共を附け置くことは何んとやら迷惑らしくもあらうが、これは公儀に對して疎略なき意を表するためであれば、萬事遠慮なく皆の者共へ申聞けられよ」
さういつて、更につづいて、
「さぞ空腹であつたらう、早く膳部を」

と、家臣に命じながら、
「悠々休息されい」
と、いひ殘して奥へ入られた。
內藏助以下十六人の人々はこれをきいていづれも感激して、中には嬉し涙を流して感謝する者さへあつた。それもその筈である。一同は國法を犯した大罪人であるから、早速切腹か、斬罪に處せらるべきところを、深切鄭重極まりない優遇を受けて、しかも淸らかなる座敷で、溫く寢られるのだから、感謝せずには居られないのである。
一同その夜の夢や如何に？

× × × ×

「現在の間は暗くて眺もなし。さぞ退屈であらう。役者の間は明るくて庭も廣いから其方へ移すがよい。」
越中守の心遣ひで、その翌日一同は役者の間の方へ移された。
ここは二間つゞきになつてゐて、上の間には、
大石內藏助、吉田忠左衞門、原惣右衞門、片岡源五衞門、間瀨久太夫、小野寺十內、堀部彌兵衞、

間喜兵衛、早水藤左衛門
の九人。下の間には、
磯貝十郎左衛門、近松勘六、富森助右衛門、潮田又之亟、赤埴源藏、奥田孫太夫、矢田五郎右衛門
大石瀬左衛門
の八人。いはゞ上の間は元老室ともいふべく、下の間は壯年室ともいはれる。
そしてこの十七人の接伴掛には、細川家に於ても最も名譽ある人々ばかり、家老の三宅藤兵衛以下十八人を選んで、交る〴〵接伴にあてられた。しかも接伴の人々は、いづれも無刀の姿で、一同の起伏する二間へと出入りした。
一同は新調された小袖三襲を貰ひ受け、それを日常着用に及んでゐた。上帶下帶なども時々取易へて貰つた。用紙、硯箱もあてがはれて、自由に手紙を書いて出すことが許されてあつた。
膳部はいつも二汁五菜の立派な馳走で、晝と夜とには酒さへ添へられてあつた。お八ツの時刻には美事なお菓子が出た。そして金網をかけたいくつかの火鉢と、錠前附の炬燵とが上と下との間に据ゑられてあつた。そればかりでなく、夜は枕許に風よけの衝立までも立てられた。そして、夜はさすがに退屈をするだらうとの察しから、藥酒と名づけて酒さへ出された。

その上、接伴係はまた接伴係で時々氣を附けて、お茶請を持參する者もあれば、また煙草などを贈るものもあつた。中には「平家物語」や「太平記」「三國志」などの書物を持寄つて徒然を慰める者もあつた。
こんな風で公私の區別をされてあまりに一同を歡待することに努めた結果、接伴係の人々の間に意見の衝突さへ起るやうになつた。
「歡待にも程度がある。小屏風を立て廻しては、中の人數を見ることが出來ぬ。それでは若しものことがあつた時には困る」
用心深い一人の接待係がいふと、最も一同に親しみ、一同に心からの同情を寄せてゐる接待係の一人堀内傳右衛門はひどく腹を立てて、
「あの衆のことである。その寢姿を見えぬとて何の氣遣がござらう。いはれる人こそ餘計なことをいはれる」
と、喰つてかかつた程だつた。
それで相手は默つてしまつたが、これによつて見ても細川家では太守を始め如何に一同が慰めるためにつとめたかゞ想像されよう。

そんな風な歡待振りであるから、風呂なども一人〳〵に取易へて入浴させた。これには一同も恐縮して幾回となく辭退をしたが「御遠慮には及ばぬ」といつてなか〳〵承知してくれぬ。そこで富森助右衞門は一策を考へて、

「一人〳〵お湯を易へて下されては却つて迷惑いたします。實は多勢入浴の方がお湯の加減がなごやかで體に宜しうござりまする」

と、申入れた。

それで、それからは二三人毎に湯を易へることになつた。

× × × ×

一同が細川家へ預けられた翌日のことである。內藏助は接伴係の一人に向つて、

「どうか拙者の髮をお結はせ下されたい」

と、申出でた。

實際、一同は討入りのままの亂れ髮であつたが、まさか結ひ直す譯にも行かないのでそのまゝにして置いたのである。それを內藏助から進んで申出でたので、一同は寧ろ驚かされた位である。しかし物にこだはらない內藏助の自由さの一面が見られて面白い。

それで係の人も、

「それはいとお易い御用」

と、早速結ひ直してやつた。

これに氣付いて他の一同にもすゝめたが、いづれも遠慮して結はうとはしなかつた。幾日か經つて漸く皆が申出るやうになつた。

× × × ×

また內藏助は非常な寒がりやであつた。四十四やそこらの年配にしては年齡に似合はぬ珍らしいことだが、それで枕について皆が寢入つた頃になると、ソッと茶縮緬の頭巾を取出して頭へ被つた。この頭巾は去年十一月出府して瑤泉院の御機嫌を奉伺した時に貰つたものであるが、內藏助はそれをいつも肌身はなさず持參してゐたのである。これは無論寒がりから來たことでもあらうが、また一つには先君の未亡人の德を慕ひ忘れないためでもあつたのである。

× × × ×

或る晩、食事の膳に向つてちびり〳〵と晩酌をやつてゐた內藏助は給仕の小坊主に向つて、

「このお爺さんもやがてお目出度くなるからその時はお精進をして、念佛を稱へて回向を賴むよ」

げまする」

と、精進料理の膳部が敷かれた。

これは越中守が、一黨の助命になる樣にと、自ら精進潔齋して、神明に祈願を籠め、その誠意が貫徹するやうにと、一黨にも菜食をさせられたのである。主君がかういふ風であるから、從つて臣下も默してゐない。傳右衞門の如きは毎日愛宕の社に參詣して一黨の助命を祈願した。

そればかりではなく越中守はかゝる忠義の士は必ずや助命の恩典に浴するものであらう、またさうなつて然るべきだと考へて、その場合には十七人共高祿を以て家中に召抱へようとまで思つて居られた。その證據は次の事柄が證明して居る。

或る日、家老の三宅藤兵衞を始め、家中の要職の人々が政務所へ集まつた時に、藤兵衞は列座の人々に向つてかういつた。

「一黨の衆等にも御赦免ともならば、いづれも兩刀に多少の損じがあるから、大小刀下されの御沙汰あるやも知れませぬ。よつて今から刀屋共に申付け、金二三枚位のものを取寄せ吟味して置かれるやう。」

この内諭を聞いた御聞番の堀内平八は、

「仰せではござりますれど、その儀は如何でござりませうか。外の御三家と違ひ當家は大身の御藩でござりますれば、十七振位の大小刀の御備へがなくて、俄かに御買入れになつたといはれては、御家の面目にかゝはりまする。小分ながらこの平八、同苗五郎兵衞、同苗傳右衞門が差替へを呈出しても三人分は辨じまする。殊に傳右衞門などは日頃から道具好きで、相應に所持いたす筈なれば、それに方々にも一振りづゝ差上げられゝば全部調ひ申さうと思はれまする」

と、口を挾んだ。

「それも御尤も」

と、いふことになつてしまつた。

平八はこのことを傳右衞門に話すと、

「それはよい御氣付でござつた。幸ひ拙者には正利の刀をこの頃入念に拵へ上げたところでござる。あれならば内藏助殿の差料にせられてもさまで恥しくはござるまい。何時にても御用に立てませう」

と、心よく承諾した。

これによつて見ても越中守を始め、いづれも家中の面々までが一黨の助命の恩典に浴するものと思つてゐたことが分る。

× × × ×

月日は徒に流れて元祿十五年の歳もはや終りに近づいた。既に死を覺悟してゐる一黨にとつてもまたいろ〳〵の感慨深いものがあつたであらう。

原惣右衞門は今日が立春と聞いて、早速筆を取つてすら〳〵と一首を認めた。

思ひきや今朝立つ春に存へて羊の歩みなほ待たんとは

翌十六年は癸未である。それで羊の歩みといつたのである。

かうして日は早くも經つていよ〳〵除夜となつた。一黨にも思出多い年は今將に暮れんとするのである。更に感慨無量なものがあらう。

内藏助はその感慨を次の一首によく詠出してゐる。

ながらへて花を待つべき身ならねどなほ惜しまるゝ歳の暮かな

さうして、元祿十六年の元日となつた。一黨は死の床の上にありながらまた年齢を一つ重ねたのである。

實際、一黨にとつては世間の人々と同樣にこの新らしい年を迎へようなどとは夢にだに考へてはゐなかつたであらう。それが御預け御詮議中の身分とはいへ、矢張り世間の人並に儀式の物を頂戴することが出來たのであるから、その喜びは如何ばかりであつたらう。

富森助右衞門は屠蘇に淘然として、

今日も春恥かしからぬ寢武士かな

と、吟出した。

久松家の人々

久松家に於ては御預けの御沙汰をお受けするや、愛宕下の上屋敷の長屋十戸を開けて一黨十人の居間にあてた。御預人だといふので一人〳〵分離することにした。そして一戸毎に馬廻または大小姓格の者を四人、持筒二人、足輕四人、仲間二人都合十二人を甲乙組に分けて、六人づゝ接伴に當らせるやうにしたのである。

しかし、主人隱岐守定直は越中守同樣義徒に同情を寄せて居られたから、一黨が到着するまで病氣引籠中の身を居間に端座して今か〳〵と待受けられた。そして到着と聞くと自身玄關まで立出でゝ、一黨が長屋に入るまで見送られたが、直に家老遠山三郎右衞門、服部源左衞門の兩人に申付けて

一黨を犒はせた。

一黨のために湯は立つ、着物は更へられた。こゝでも二汁五菜の馳走であつた。そして各自に支給されたものは、

小袖……三枚　上帯……一筋
下帯……一筋　夜着……一枚
蒲團……二枚　枕……一個
胴衣……二枚　風呂敷……一枚
手拭……二筋

であつた。

しかし、夜食だけは一汁三菜で、午前と午後とには薄茶または煎茶にお菓子を添へて出された。

久松家は細川家に比べると小藩なだけに、萬事公儀に對して遠慮がちであつた。それで一黨の接待について老中まで伺書を出した。

淺野内匠頭家來御預に付相伺候覺

一、御預者共十人、今夜は私居家敷内長屋圍に一人宛差置申候。尤も番人夫を付置き申候。

明日は三田屋敷へ差遣し申すべく候。

一、若し氣分惡しき節は、輕體に候はゞ醫者の藥用申すべきや。

一、上帶、下帶、常の通り仕り申すべきや。

一、櫛道具、毛ぬき、はさみ、扇子望み候はゞ如何仕るべきや。

一、楊子望み候はゞ相渡し申すべきや、並に箸は短くし食事の節用ひ申すべきや。

一、硯、紙等望み候はゞ如何仕るべきや。

一、行水望み候はゞ如何仕るべきや。

一、自然火事等の節は、下屋敷へ遣はし申すべきや。

十二月十五日　　久松隱岐守

老中はこれを披見して、あまりにも業々しい伺書なので、翌日用人を呼出して、

「内匠頭家來の者共永く御預になる譯でもなく、その上彼等は公儀に對し惡事を働いたといふでもないから、心づき次第よく取扱はれるやうに」

と、口上で申達された。それで久松家でも安心して、それからは火鉢までも各自に出すやうになつた。

しかし、久松家では一黨を上邸に入れたが、こゝでは火災などの場合には不用心だと考へて、十六

日には三田の下邸へ移すことになつた。そして事々しい行列を整へて一黨を護衛しながら三田の下邸へと送り込んだ。ここでも十戸の長屋を開けて一人〳〵を入れた。

このことがいつか幕府の耳に入つたので、それでは一黨が窮屈であり、退屈であらうと推察されて、御目附を以て傳達された。

「一黨を二組に分ち、各五人宛を二間に入れるやう」

この訓令を受けた久松家は大に慌て、早速一黨を二組に分けて、一番二番の長屋に五人宛を同居させることにした。

一番の長屋の方には、

大石主税、堀部安兵衛、中村勘助、貝賀彌左衛門、不破數右衛門

の五人。二番の方には、

岡野金右衛門、大高源五、菅谷半之亟、千馬三郎兵衛、木村岡右衛門

の五人。

そして今度は馬廻または大小姓格の士二十四人を按伴係とし、これに持筒二十四人、先筒三十人、仲間十二人を附し都合九十人を二組に分けて警戒の任までをも兼ねさせた。その上邸内には新に二ケ所の番所を設けて、番頭奥平大膳左衛門、側九兵衛を始めとし、物頭目付、徒歩目付などは晝夜交替〳〵嚴重に警戒した。

× × × × ×

年が變つて元祿十六年の正月となつた。隱岐守は病氣全快の屆けを幕府に出し、大樹家への御禮はすまされた。そして四日には一黨へ小袖を贈られた。五日には下邸に出向いて、大書院に於て初めて一黨に面接された。

「此度の一擧本望を達し、定めし滿足であらう。圖らずも各々を預ることに相成り、自分に於ても本懷である。早速面接申すべきところ不快のため今日まで延引いたした。實は馳走の仕樣もあるが、公儀に對し憚るところもあれば兎角心底には委せぬ。しかしながら、不自由なきやうには申付け置いたれば、何なりとも所望があらば家來共まで申出られるやう」

と、温情を述べられた。

「御厚情の程有難く存じ奉りまする。」

主税は一同を代表して御禮を申上げた。

すると、隱岐守は主税に向つて、

「其方の母御は如何なされた」
と、微笑みながら問はれた。
「昨年以來、里方の但馬の豐岡に居りまする」
主税は身體の大丈夫に似合なく可愛い小さな聲で答へた。
「兄弟はあるかな」
隱岐守は更に問ひをつゞけられた。
「舍弟兩人ほどござりまする。いづれも母の許に參つて居りまする」
と、主税は言ひさして、
「昨年京都を立つて御當地に參りまして以來、一途に復讐のことのみに心を奪はれまして母のことなど打忘れて居りましたが、只今御下問を蒙り、いろ〳〵と思ひ出しまして何んとなうなつかしく思はれまする」
と、やゝ悄然たる態に見えた。
これを聞いて隱岐守を始め、一座は暫く暗然とした。

毛利家及水野家の人々

毛利家が御預けの御沙汰を蒙ると、十人の御預人を駕籠に乘せて、麻布日ケ窪の上邸へ護送の途中は、駕籠に錠を下し、青繩までもかけてまるで囚人同樣にして取扱つた。そして一黨を收容した長屋の窓も往來へ面した方を板を打つけて戸外を見えないやうにした。そして嚴重の上にも嚴重に警戒した。

その中に幕府の義徒に對する同情は承知する。細川家の待遇などを見聞したので、それから俄かに二汁五菜は出る、衣服その他の必要物は支給されるといつた風だつた。甲斐守自身も一同に面謁される、接伴の方法も改められた。

× × × ×

水野家はイの一番に泉岳寺へ受取の士卒を出した位だつたが、一同を護送の途中、駕籠の戸を鎖させた。そして金地院前の中邸まで護送して長家に收容し、戰時同樣な物々しい身裝で嚴重に警戒した。

しかし、主人監物は廿一日に一黨九人の者に面謁して、鄭重なる慰藉を與へた。

×

一黨が上野介の首級を先君の墓前に供へて奉告祭を終つて廣間へ入つた時、内藏助は接伴僧に向つて、

「上野介殿の御首級、亡君の御墓前に供へた以上はもはや我々には用なきもの。と申して、高貴の方の首級、輕卒にもいたされませねば、暫く御方丈に御預り下さるやうに」

と、申入れた。

で、寺僧は三寶のまゝ受取つて本堂の佛前に置いた。

しかし、いつまでこんなものを預かつて置く譯にも行かないので、泉岳寺ではその夜の中に寺社奉行阿部飛彈守へ屆出て、翌日駕に乘せて、石獅、一呑の兩使僧を附して、これを吉良邸へ送込ました。

吉良邸では丁度首級の在所を搜がしてゐるところだつたので、非常に喜んだ。しかし、腰拔け家老の左右田孫兵衞、齋藤宮内のことだから、こんな場合に威張つてやらうとでも思つたものか、

「確に御受取申した」

と、えらさうにいつて、兩使僧をそのまゝ追返さうとした。ところが兩使僧は頑として、

「御首級を御渡し申した以上は、御受取書を頂戴いたさねば使僧の役目が立ちませぬ。早速受取書を御願申す」

と、主張してなか〳〵動かうともしない。それで家老達も閉口して、奥へ入つて暫く相談した結果、澁々左の一書を認めた。

覺

一、首　一ツ

一、紙包　一ツ

右の通り慥に請取申し候。念のため斯くの如くに御座候以上。

吉良左兵衞

十二月十六日　左右田孫兵衞

齋藤宮内

泉岳寺御使僧

赤穗義士

石獅僧
一呑僧

かうして吉良上野介はその首級と共に十二月十九日、その菩提寺なる牛込築土の萬昌院へ葬られた。「靈性院殿實山相公大居士」が、その法號である。

宥恕か處刑か

一黨の處分については自ら二派に分れた。一は名教論の上に立ち、一は法理論の上に立つた。前者は大學頭林鳳岡(信篤)が主張し、後者は荻生徂徠(茂卿)が强調した。

本來からしていへば、一黨今回の擧は誠忠から止むに止まれずして決行したとて、名教上からは當然立派なる賞讃に値ひすべき行爲であるが、法理上からいへば徒黨を組んで敢行したとだから、兇行を逞しうしたといへる。だから情に於ては如何にも宥恕してやりたいが、掟の前にはそのまゝでは置かれない。

それで將軍綱吉公も、これが裁斷には大分苦心躊躇せられた。で、閣老以下芙蓉間以上の者に投票

をさせ、それによつて可否を決定しようとされた。

ところが、投票の結果、諸大名の大半は宥恕であつたが、殘る半分は態度が頗る曖昧であつた。といふのは上杉家は紀州公の近親であり、その上當時第一の權勢家たる柳澤美濃守吉保が、日頃から吉良家を最負にしてゐる。それを知つてゐるので、若しもその意に逆つたなら、どんな事になるかも知れぬといふ懸念があつたから、中には棄權をする者も少くはなかつた。そこへもつて來て上杉家は一家の名譽回復のために一黨の處分を内願してゐることを知つてゐるので、曖昧な態度をとる大名も多くあつた譯である。

それで綱吉公を始め、閣老までがこれが處分に迷うてゐる時、林大學頭は、

「かゝる忠義の者共を出だすといふのも、御治世の德が海内に普及した結果と存ずる。もしこれ等の者共を御處刑に相成るならば、今後如何にして天下の忠義を奬勵いたすべき？この度のことは是非共御寛典の御詮議を願はしう存じ奉る」

と、熱心に主張した。

ところが荻生徂徠はこれに反してどこまでも法理論からいつた。

「法は天下の大綱である。天下一日法を廢すれば國家の政道は立つべからず」

と主張し、そして左の議書を呈出した。

義は己を潔ようする道にして、法は天下の規矩なり。四十六士のその主のために仇を報ずるは、これ臣たる者の恥を知るなり。己を潔よくする道にして、その事は義なりといへども、その黨に限るとなれば畢竟私の論なり。然るゆゑんのものは、本これ長矩殿中をも憚らずして、その罪に處せられしを、また候吉良氏をもつて仇とし、公儀の免許もなきに、猥りに騒動を企ること、これ法に於て免れざるところなり。今四十六士の罪を決せしめ、士の禮を以て切腹に處せらるるものならば、上杉家の願ひも空しからずして、彼等が忠義を輕んぜざるの道理、もつとも公論といふべし。もし私論を以て公論を害せば、此以後天下の法は立つべからず。

この堂々たる法理論には大いに動かされた。先に林大學頭の名教論に動かされた上は、兩者の議を具して、將軍家の直裁を請ふこととなつた。その結果、

「切腹申し付けよ！」

の裁決となつてしまつた。

この斷乎たる裁決を聞いた宥恕論者は承知しない。

「御政道の上から浪人共に切腹を仰付けられるのは止むを得ないとして、吉良左兵衛は如何相成りまする。人の子にして父を討たれながら、當夜の體たらくは如何でござる。斯樣な卑怯未練者を、御旗下に差置かれては、一旦緩急の場合に何の御役に立ちませう。もしこのまま差置かれるに於ては公儀の御威勢にもかかはりまする」

そこで閣老は再び將軍の直裁を仰いだ。將軍もこれを尤もだと思はれたか、

「その家を取潰し、左兵衛には配流申付けよ」

この沙汰が下つた。これによつて權勢を誇つた吉良家も失はれてしまつたのである。

卽ち一黨が處刑の宣告を申渡されたと同じ日の二月四日に、吉良左兵衛は配流の申渡しを受けたのである。

淺野内匠頭家來共、上野介を討候節、其方仕方不屆に付、領地召上げられ、諏訪安藝守へ御預仰付けられ候也

吉良左兵衛

そして卽座に安藝守の家來に引渡された。で、左兵衛を駕に乘せ、戸には錠を下し、青網を掛け、一旦安藝守邸へ入つたが、二月十八日に至つて、その領地信州高島に送られた。時に左兵衛十八であつた。ここで居ること三年、配所の月を眺めてゐたが、寶永三年正月二十日死した。

日光宮法親王

正月二十二日に老中稲葉丹後守は一黨の御預けになつてゐる四家の留守居を召出して、

「一同の親類書を詳細に書出させるやうに」

と、申達された。

そこで四家はその通りを提出すると、

「各人の生年月日をも記入し、且つ華押をも据ゑさせよ」

と、下げられた。で、命令の通りにして二十六日まで全部提出した。

これは當時の恒例として處刑が決定すると、このやうにしたのである。それで四家も、一黨も、幕府の内議が既に處刑を決定したことを知つた。

二月朔日のことである。日光の御門主公辨法親王は年始の御禮として御登城されて、親しく綱吉公と御物語があつた。その席上に於て綱吉は、

「政治を行ふ身ほど世にも心苦しいことはない。故淺野内匠頭の家來のことども迫々御聞及びもおはしませうが、その忠節義烈、稀に見るものでございまする。何んとかしてこれを助け遣はしたくは存ずれど、左樣いたせば政道立ち申さず、如何とも詮方なき樣にございました」

と、心ありげに嘆ぜられた。法親王はこれを聞かれて、

「御苦心のほどさこそと御察し申上げまする」

と、會釋されたまま退出されてしまつた。

この時のことを後になつて、法親王は左右の者に物語られた。

「自分一生に將軍からあの話を承はつた時ほど心苦しい思ひをしたことがない。人もあらうにこの法體にあの話、將軍も處分にあまり、それとなく助命を求めて貰ひたいとの意であつたゞらうが、自分にも不愍の至り、出來得るならばこの墨染の袖の下へ隱してやりたいは山々なれど、何を申すも四十餘人、その裡には未だ血氣の定まらぬ壯年の者も少くはない。それ等が永へ、て萬一晩節を誤るやうなこともあらば、あたら英名に傷つかぬとも測られぬ。ここは彌陀の大慈悲を奮ひ、三法のままに委せ置けと決心をし、終に將軍の謎を解かずに柳營を退出した」

心の準備

一黨は處刑の近づいたことを知つて、各自心の準備に取りかゝつた。細川家にゐる人々にはそれとなく遺書などを認めて、接伴係の誰れ彼れとなく托した。

或る日、富森助右衞門は一同を代表して、傳右衞門に向ひ、

「此度の處刑は斬罪と覺悟をして居りましたところ、世上の噂など追々伺ひ、切腹など有難き御沙汰を仰付けられることもや、またそれならば御邸に於ててはござるまいかなど、思つたりなどいたしまする。萬一左樣にもならば、死後に親類、緣者などから如何に申出ましても、十七人の遺骸は泉岳寺内にて一つの穴に御埋め下さるやう、御願ひ申しまする」

と、申出でた。

その翌日、吉田忠左衞門は傳右衞門に、

「昨日は助右衞門を以て一同の希望を申上げたところ、早速御承諾を得て忝う存ずる。それにつき拙者はお見掛け通り、圖體大きく且つは年寄りの見苦しさ、幸ひここに少々金子持參仕ればこれにて白布を買求め、二重の大風呂敷にして、四方に鉤をつけ、死骸の見えぬやう、その裡に包んで御括らせ下さるやう御依賴申す」

と、いつてカラ〳〵大笑した。

× × × × ×

二月二日の夜のことであつた。下戸の吉田忠左衞門、間瀨久太夫、小野寺十内、堀部彌兵衞はアマミゾレを酌み、上戸の大石内藏助、原惣右衞門、磯貝十郎左衞門は酒を飲んでゐるところへ傳右衞門が入つて來た。

「これはよいところへお出で下された」

内藏助はさういつて、

「十郎左衞門、その盃を傳右衞門殿へ」

と、指圖した。

「御免」

傳右衞門は盃を乾した。と、内藏助は、

「これへ」

と、手を差出して盃をうけた。
「拙者こそ御盃を戴き申すところ――」
傳右衞門は少々恐縮の體であつた。
「いや、是非に」
内藏助は無理に盃を貰つてグッと干した。そして、
「御返盃」
と、返へした。
「忝う」
傳右衞門が飲むか飲まないうちに、惣右衞門は、
「拙者にもどうぞ」
と、手を差出した。
「これは〳〵」
傳右衞門は笑ひながら干して盃を差すと、惣右衞門はぐつと一息に飲んでそのまま返す。と、内藏助は、

「その盃、今度十郎左衞門へ賜はりたい、彼はなか〳〵いける口でござる」
「如何にも」
傳右衞門は干して十郎左衞門に盃を差した。盃は波々と滿たされた。
「おつとゝゝ……」
十郎左衞門はこぼれさうになつた盃を唇へ持つて行つて半分ばかり干した時に、内藏助は、
「そのまゝ今一つ重ねさせて戴きたい」
と、笑ひ乍らすゝめると、十郎左衞門は、
「これはたまらぬ、もう御免を」
と、いひながら下の間に逃込んだ。それを見て一座はどつと笑ひこけた。
これは餘所ながらの傳右衞門との別れの盃であつたのである。

四　家への奉書

二月三日、幕府はいよ〳〵明四日を以て一黨の處分をなすことに決定し、大目附、御目附、御使番

以下當日の係官を任命し、更に閣老から四家へ、明日一黨へ切腹仰付けられる筈につき、豫めその用意をとの内示があつた。

この内示を受けた四家の落膽は非常なものであつた。幕府の内外にも宥恕論者の勢力が可成り盛んであり、民間の輿論は九分通りまで宥恕論であつたから、大抵はさうなるに違ひないと望みをかけてゐた矢先き、今日の内示だつたので、四家の中殊に細川侯の落膽は目に餘るものがあつた程だつた。

「上命であれば今更致方がない。それにしてもあたら義士を失ふは惜しいものである」

越中守は嘆息を洩らされた。そして家臣の者に、

「明朝は二つの花瓶に花を活け、一黨の居間に一つづゝ飾付けよ」

と、命ぜられた。

これは突然の公命に一黨を驚かしてはならない、花を活ければ一黨はそれとなく最早最後が迫まつたことを氣付くだらうとの、細い心遣ひからである。

翌四日の午前中、左の奉書は四家へ發せられた。

御預け置れ候淺野内匠頭家來、御仕置仰出され候に付、御目附荒木十右衛門、御使番久永内記罷り越すべく候。其節御自分出會はるゝに及ばず候。家來ばかり差出さるべく候。以上

穐葉丹後守
秋元但馬守
小笠原佐渡守
土屋相模守
阿部豐後守

同書は巳の上刻即ち午前十時に細川家へ達した。他の三家へもそれぐ前後して到達せられた。

それから老中、若年寄列席の上にて、老中秋元但馬守から左の人々に對し四家御預の者へ切腹の宣告兼檢視の役を口達を以て命ぜられた。即ち、

細川家へは、
御目附荒木十右衛門　御使番久永内記

久松家へは、
御目附杉田五左衛門　御使番駒木根長三郎

毛利家へは、
御目附鈴木次郎左衛門　御使番齋藤治右衛門

水野家へは

御目附久留十左衛門　御使番赤井平右衛門

この四檢視に各々御徒目附五人乃至七人、御小人目附五人乃至七人、外に御使衆を六七人づつ差添へられた。

× × × ×

切腹の仕度としては、四家とも左の品々が整へられた。

白紋付裃……一具　小袖……一重

上帶……一筋　下帶……一筋

足袋……一足　小脇差……一振

白三寶……一箇　扇子……一本

右の中三寶は前の縁を破つて用ひ、小脇差は切尖五分ほど現はして、他は觀世捻にて卷いてあるものを用ふ。

細川家に於ける一黨の居間には果して生花が飾られた。朝から入念の馳走が出て、すぐ入浴といふことになつた。そして今日は越中守御來邸といふので一黨は衣服を更めさせられた。午餐の終る頃から何んとなく邸内は騷々しく、落付かないものがあつた。それは何を意味するか一黨にはよく分つてゐた。しかし、いづれもいつに變りなく談笑をして時を過してゐた。

夕食はいつになく早く供された。そして一黨が喫し終つた時、接伴係の八木市太夫が入つてきて、

「御上使御來邸につき、御召物を御改めなさるやう」

と、傳へた。そして小坊主に命じて、かねて用意してあつた淺黄無垢の麻裃、黑羽二重の小袖などをそれ〴〵一同の前へ取出させた。一同は手早く衣服を着換へて、きちんとして坐つてゐた。

「御上使！」

その聲に一同は平伏してゐるところへ御目附荒木十右衛門、御使番久永内記は入つて來られた。

十右衛門は一黨に向ひ、

「御上意」

と、聲をかけてから、

「淺野内匠頭儀、勅使御馳走の御用仰付け置かれ候ところ、時節柄殿中をも憚らず、不屈の仕方に付、御仕置仰付けられ、吉良上野介儀は御構ひなく差置かれ候ところ、主人の仇を報じ候」

と申立て、内匠頭家來四十六人徒黨をいたし、上野介宅へ押込、飛道具など持參、上野介を討ち候始末、公儀を恐れず候段、重々不屈に候。よつて切腹申付くるものなり」

と宣告し、そして内藏助以下十六人の姓名を一々讀上げられた。

内藏助は少し頭を擧げて、

「如何樣の重科にも處せらるべき處に、すべ好く切腹仰付けられ、有難き仕合せに存じ奉ります」

と、お受けをした。

そこで十右衞門は今までの窮屈な態度を改めて、急に碎けた調子になつて、

「内藏助とは昨年赤穗にて面談以來、變つた場所にて對面いたすな」

と、繁々とその顏を眺められた。

「御意にござりまする」

内藏助も過ぎし日のことを思ひ出でてなつかしさうに見返すのであつた。赤穗の受城使の時は十左衞門といつたが、今は十右衞門に改められたのである。

と、十右衞門は、

「これは自分の一存にて話して置くが、吉良左兵衞は、此度の仕方不屈の故で、領地は召上げられ、諏訪安藝守へ永の御預と相成つた。左樣含み置かれるやう」

と、告げられた。

「それはまことに本懷の至りに存じ奉りまする」

内藏助はいとも滿足の態に見えた。

兩使が座を起たれた後へ接伴役宮村團之進、長瀨助之進は、越中守の内意を帶びて入つて來た。

「此度方々を御預り申して以來、主人には、何卒御一同へ吉左右をお聞かせ申したいといろ〳〵と心を碎かれた甲斐もなく、今日に至つてはもはや詮方もござりませねば、心靜かに支度せられるやう、主人の吩咐の旨をお傳へ申しまする」

内藏助は感涙に咽びながら、

「御當家御預け以來今日に至るまで、何から何までお手厚き御取扱、まことに言葉にもつくしませ

ぬ。只々有難く御禮申上げ奉る旨、何卒御前へ御取次が願はしう存じまする」

と、感謝して、

「殊に今日切腹の御沙汰、武士の面目この上もございませぬ。さりながら此度の一擧は、いづれも内匠頭家來のみにて、主人の御無念を晴らしたいとの一圖に出でましたのみで、一人も餘の者は加へませぬ。然るを『徒黨いたした』との御沙汰、これのみは心外に存ぜられまする」

と、いつて苦笑した。

そして内藏助は一同を集めて、越中守の内意を傳へた。一同は感謝し感泣した。それから思ひ〳〵に立上つて最後の支度に取りかかつた。

「さらば最後の盃を」

土器と銚子とが取出された。義徒の最後の盃を受けようとして、接伴係の人々は我も〳〵と集まつてきた。そして土器をうけた。

堀内平八、堀七郎兵衞の兩接伴係は、

「方々の御遺書もございらうと存じ、御目附まで伺出ましたところ、内見の上、それ〴〵届け遣はせとの御沙汰、御遠慮なくお書置きなされまするやう」

と、一黨へ注意を與へ、丁度そこへ來合せた傳右衞門に向ひ、

「貴殿は方々とお心易い、御銘々に伺はれよ」

と、いつて小坊主に判紙と硯箱とを運ばせた。

で、傳右衞門は先づ内藏助に向つて、

「御遠慮なく御認めなされ。」

と、すゝめると内藏助は頭を振りながら、

「此期に及び、何の申し殘すことがございませう」

と、いつて筆を取らうともしない。他の一同も同樣である。

そこで傳右衞門は何か心に頷きなぎがら、内藏助の側に寄つて、

「何んなりと仰せ置かれることがあらば身に引受けてお通じ申さう」

と、いふと内藏助は、

「さほどまでに仰せられるならば、拙者の從弟に大西坊と申すが男山八幡に住しまする。これへお序の節に、今日の御沙汰と申し、また、晴れ〴〵したる天氣と申し、快く死についた旨を申聞け下されい」

と、いつた。他は何んにもいはなかつた。

次に吉田忠左衛門に尋ねると、内藏助と同樣の意味合のことを、

「緣者の伊藤十郎太夫へお話し下さるやう」

と、いつた限りである。

原惣右衛門は今朝認めた辭世の一首を示した。

かねてより君と母とに知らせんと人より急ぐ死出の山路

次に片岡源五右衛門は、

「かねてお話申しました通り、拙者の祖先備前以來の朱柄の槍を、泉岳寺へ殘し置きましてござれば、遺族の者へ遣はしたく、何卒宜しく」

と、依賴した。

間瀨久太夫は恐縮の體にて、

「まことに尾籠なる話ではござりまするが、この頃少々腹下し、やつと快方にはござれど、萬一御場所にて疎略もいたさば……」

と、いふのを傳右衛門引取つて、

「御念の入つたこと、お氣遣御無用になされませ。委細承知いたしましてござる」

と、請合つたので、久太夫は安心の體であつた。

小野寺十内は笑ひながら、

「荆妻が腰折、惣右衛門に書かせて御覽の由、今日の始末は京都弓削太郎左衛門まで仰せ遣はされ、妻が許へも通じくれますやうに」

と、依賴した。

間喜兵衛は、相變らず沈默を守つてゐたが、この場になつても矢張りさうであつた。それで傳右衛門の言葉をきくと、微笑しながら懷中から一首を取出した。

草枕むすぶ假寢の夢さめて常世にかへる春の曙

磯貝十郎左衛門は、

「御懇情有難く存じまする。この上ながら老母のこと何卒御心付下さるやう」

と、賴入つた。で、傳右衛門は、

「慮外ながら拙者の母と存じ、氣をつけ申すべく、御心安らかに」

と、いふと十郎左衛門は漸く安堵の體であつた。

堀部彌兵衞、この老人は平生から下戸であつたが「人間はどうも飲む方がいいやうである。拙者の緣者堀部甚之允と申す者が肥後に居りまする。彼にお會ひの節はこの意をお傳へ下さい」

と、何んと淡々たる遺言であらう。

近松勘六は、

「拙者は討入りの際の負傷でこの手が痛みましたが、御手厚い御治療で全快いたし、喜んで身まかつたと長福寺の文良へお傳へ下さい」

富森助右衞門は、

「思ひ殘すこともござらぬが、老母のことのみは何卒宜敷く御願ひ申す」

と、いつた。

潮田又之亟は、

「お序もあらば播州北條の遺族共へこれをお示し下されたい」

と、辭世の一首を示した。

武士の道とばかりを一筋に思立ちぬる死出の旅路に

早水藤左衞門も同樣である。

地水火風空のうちより出でし身のたどりてかへる天のすみかに

赤埴源藏は、

「この間中は出來もののために閉口いたしましたが、昨日來全快いたし、今日は御上使を以て切腹の御沙汰、本望のことにござりまする。御老中土屋相模守殿御内に、緣者本間安兵衞と申す者が居りますれば、今日のこと、それへ何かお傳へ下されたい」

奧田孫太夫は、

「拙者この歲になるまで切腹の稽古いたしたことがござらぬが、如何やういたせば宜しきや」

と、いふので、傳右衞門は眞顏になつてその要領を敎へる。それを富森助右衞門、磯貝十郎左衞門の兩人が口を出して、

「只頸を差出し延べてさへ居ればそれで十分でござる」

と、いつたので一座はどつと笑ひ出した。

矢田五郎右衞門は、

「御聞及びの通り、拙者討入りの際、佩刀を打折り、對手の刀を奪ひとりそのまゝ參つてござれば、死後御下渡しの節は、遺族の者共が惑ひませう。その譯をお傳へ下されたい」

最後に大石瀬左衛門は、

「今日の首尾を同名大石無人、郷右衛門、三平の三人へ お序でに申聞け下されたい」

と、いつた限りである。

切腹

細川邸に於ける切腹の場所は、大書院前の廣庭と定められた。

大書院の上には屏風を立て廻し、その前に檢視として御目附荒木十右衛門、御使番久永内記の兩使が着座。少し下つて細川家の家老三宅藤兵衛以下君側の人々が居流れる。御縁側には公儀の御目附七人が控へる。縁先きの白砂の上には薄縁を敷いて公儀の御小人目附、それにつづいて細川家の御小姓頭、御留守居等列座する。

次に大書院から前の左右袖垣の外には、公儀の御使衆並に細川家の諸下役控へ、左方に袖形に出た役者の間には、前々塀を隔てて義徒の一黨呼出しを待構へる。その廊下には介錯人の一列が肩を並べて詰めてゐる。

檢視の座から眞正面の庭に疊と疊を敷並べ、その上に白布の蒲團を敷いて切腹の場所とし、疊も蒲團も一人毎に取替へるのである。そしてその場所の背後から横にかけて白布の幔幕は打張られて、切腹の場所を圍うてゐるのである。

次に切腹及介錯の人々を擧げて見よう。

切腹義徒

大石内藏助　安場一平
吉田　忠左衛門　雨森清太夫
原惣右衛門　増田貞右衛門
片岡源五右衛門　二宮新右衛門
間瀬久太夫　本庄喜助
小野寺十内　横井儀右衛門
間喜兵衛　粟屋平右衛門
磯貝十郎左衛門　吉田五左衛門
堀部彌兵衛　米良市右衛門

介錯人

近松勘六　横山作之亟
富森助右衛門　氏家平九郎
潮田又之亟　一宮源四郎
早水藤左衛門　魚住惣右衛門
赤埴源蔵　中村角太夫
奥田孫太夫　藤崎長左衛門
矢田五郎右衛門　竹田平太夫
大石瀬左衛門　吉田孫四郎

時刻は迫まつた。
荒木十右衛門は、
「大石内蔵助！」
と、宣告された。
役者の間の入口に控へてゐた御小姓の吉弘嘉左衛門、八木市太夫は旨を承けて、
「大石内蔵助御出で召されい」

と呼ばつた。
内蔵助は座を起つて廊下の方へ出て行かうとした時、潮田又之亟後から、
「いづれも追つつけお後から」
と、聲をかけると、内蔵助は振返つて、
「お先に……」
と、只一言、殘して出て行つた。
御小姓が先導、介錯人が後從にて、座前の設けの場所に内蔵助はついた。その時小脇差を載せた三寶が前へと運ばれた。と、介錯人安場一平は太刀を執つて後方に立つ。内蔵助は端然として、檢視の方に一禮して、徐ろに兩方の肩衣を脱ぎ、肌押し脱いで三寶を引寄せ、小刀を腹に擬したる刹那、
「鋭ッ！」
と、一聲、首は胴體を離れるのである。
一平は首を提げて面を檢視の方へ向けてその實驗に供するのである。死骸はそのまゝ蒲團に包んで場外へ運び出し棺に納めるのである。
と、役者の間の入口にて、前の兩御小姓は、

「唯今大石内藏助殿御切腹相濟みました。次は吉田忠左衞門殿お出で召され」

と、呼はつた。

かうして十七人悉く切腹を終つた時は、彼是暮六つの鐘の入相を告げる頃であつた。

久松、毛利、水野の三家の有様も細川家と同様であるから省略する、只三家とも小藩だつたから、介錯人は一人で二人の義徒の介錯をしたことが違ふ位のものである。

この夜の中に一黨の死骸を納めた棺は泉岳寺へ運ばれた。四十六の白棺は本堂の縁側に据ゑられ、大讀經、大引導の後、先君の墓側へと埋葬されたのである。

即ち、

忠誠院刃空淨劍居士

刃仲光劍信士　大石内藏助良雄

刃峰毛劍信士　吉田忠左衞門兼亮

刃勘要劍信士　原惣右衞門元辰

刃譽道劍信士　片岡源五右衞門高房

刃以串劍信士　間瀬久太夫正明

小野寺十内秀和

刃泉如劍信士　間喜兵衞光延

刃周求劍信士　磯貝十郎左衞門正久

刃毛知劍信士　堀部彌兵衞金丸

刃隨露劍信士　近松勘六行重

刃勇相劍信士　富森助右衞門正因

刃聰空劍信士　潮田又之亟高敬

刃破了劍信士　早水藤左衞門滿堯

刃廣忠劍信士　赤埴源藏重賢

刃察周劍信士　奥田孫太夫重盛

刃法參劍信士　矢田五郎右衞門則武

刃寛德劍信士　大石瀨左衞門信清

刃上樹劍信士　大石主税良金

刃雪輝劍信士　堀部安兵衞武庸

刃露白劍信士　中村勘助正辰

刃水流剣信士　菅谷半之亟正和
刃観祖剣信士　不破數右衛門正種
刃道互剣信士　千馬三郎兵衛光忠
刃通普剣信士　木村岡右衛門貞行
刃洞逸剣信士　岡野金右衛門包秀
刃電石剣信士　貝賀彌右衛門友信
刃無一剣信士　大高源吾忠雄
刃袖拂剣信士　岡嶋八十右衛門常樹
刃當拂剣信士　吉田澤右衛門兼貞
刃恰春剣信士　武林唯七隆重
刃鍛錬剣信士　倉橋傳介武幸
刃模唯剣信士　間新六光風
刃有林剣信士　村松喜兵衛秀直
刃可仁剣信士　杉野十平次次房

刃量霞剣信士　勝田新左衛門武堯
刃補天剣信士　前原伊助宗房
刃風颯剣信士　小野寺幸右衛門秀富
刃澤藏剣信士　間十次郎光興
刃湫跳剣信士　奥貞右衛門行高
刃擲振剣信士　矢頭右衛門七教兼
刃清元剣信士　村松三太夫高直
刃太及剣信士　間瀬孫九郎正辰
刃響機剣信士　茅野和助常成
刃常水剣信士　横川勘平宗利
刃珊湖剣信士　三村次郎左衛門包常
刃利教剣信士　神崎與五郎則休

の四十六基は四家御預の順序によつて、内藏助を第一として整然と建てられたのである。

× × × × ×

最後に寺坂吉右衞門のことを一言して置かねばならぬ。吉右衞門については前に一寸記しておいたが、内藏助の命を受けた吉右衞門は、瑤泉院の手許へ書面を屆けると、暫らく江戸にかくれて一黨の樣子を窺つてゐたが、四家へ御預けとなつたことを知ると、江戸を發つて播州へ趣き、龜山へ立寄つて一黨の家族に消息を傳へた。それから吉田忠左衞門の婿の伊藤十郎太夫の許を訪れた。十郎太夫は姫路の城主本多中務大輔に仕へて二百五十石を祿してゐたが、當時は江戸に在つて、姫路の宅には忠左衞門の妻子が引取つてあつた。吉右衞門はこれを見舞うて一々報告をした。

それから一旦江戸へ歸つて來たが、一黨が切腹を仰付かつて相果てたのを知ると、再び姫路へ返つた。その中に本多侯が減祿されたので家臣までが小祿に落ちて、伊藤十郎太夫も窮乏を告げるやうになつた。しかし、その中に在つて十二年間の長い間吉右衞門は伊藤家のためにまめ〳〵しくつくした。

が、伊藤家では報ゆることが出來ないので江戸麻布の曹溪寺に寓してゐる相馬某に書を寄せて吉右衞門のことを賴んだ。そして、吉右衞門は江戸に出てこの曹溪寺に暫く厄介になつた。その中に旗本の山内主膳豐淸に扶持されて仕へる身となつた。そして八十三歳まで同家に仕へて延享四年十月六日歿した。墓は曹溪寺にある。（完）

淨瑠璃坂の仇討

櫻にはやゝ早い春のころほひである。下野國宇都宮の城下、興禪寺の廣間は、肩衣いかめしい城中の士の面々で一入賑かだつた。宇都宮十萬石の先城主、奥平美作守忠昌が亡くなつて、その百ケ日の法要の當日である。寺院らしい廣々とした疊、應膺な襖の間から、金襴の袈裟、緋、紫などの衣の端がチラ〳〵隙いて、導師や役僧の準備萬端整つたらしいのに、法事は容易に初まらなかつた。人々の顏には退屈さが見え初めた。

「内藏允殿はどうした。例によつて遲いことぢや、己れが出なければどうせ法事は始まらないとでもいつたやうな高慢ぶりぢや、禮儀作法もわきまへないで、物知り顏な……内藏允殿はまだか？」

奥平隼人は彼の圓い眼をむいて叫鳴り散らした。今まで退屈してゐた人々も、隼人のあたり憚らぬ大聲には思はず眉をひそめるのだつた。

奥平の家中でも二千石取りの家老格、奥平隼人ともあらうものが、と、人々は禮儀も場所柄も心得ぬと嘲笑の氣持をみじろぎにかくした。

隼人の一徹と、ユーモアを持たない無骨さは家中の通りものになつてゐた。それがまた隼人の自慢でもあるのだ。

「武士に學問は要らない。學問をすると人間が柔弱になつて、いざといふ時の役に立たない」

武士は強くさへあればいゝ、これが隼人の持論だつたから、何かにつけて内藏允が氣に入らないのも無理はない。

隼人のやうな人間は、どんな世の中が來ても、常にいざといふ時が、今日にも目の前に現れるやうな幻想を一生搔抱いて暮すことだらう。世の動きなどは全く判らない。いつでもいざ戰爭なのである。用心がいゝと言はうか、單純な愛す可き男である。

奥平内藏允は奥平の家中で、千石取りの老臣の家柄だつた。學問のたしなみは深かゝつたが、三十四才といふ男盛りを、とかく病身勝ちである。

今日も先君の法事だから、ぜひ出席しなくてはと考へてゐるところへ、相憎の差込みだつた。今でいふ胃痙攣のやうな病氣である。

内藏允の一子、當年十三才の源八郎が名代に立つた。水色ぼかしの振袖の袴のひだを輕く押へて、凛々しい口元をきつと引締めて、寺の廣間を進んで來た。

「遲なはりました」

といつて、隼人の聲高最中に、手をついたのは、家中評判の美少年源八郎で、當の内藏允ではなかつた。

「奥平殿お入り」

案内の聲に、きつとして待構へてゐた隼人は、いさゝか拍子抜けがした。そして、代理の少年の美事な美しさが一層癪にさはつた。かういふ時には何でも癪にさはるものかも知れない。

「内藏允殿は如何いたされた。後よりか？」

語氣に冷たく嘲りを含んでゐる。

「いさゝか所勞の氣味にござりまして……」

源八郎の濡れたやうな前髪が心持下つた。

「御名代か？　相變らず御柔弱なことで、それでよくも御奉公がなつたものぢや——」

ひつそりした周りの人々の空氣の中に、源八郎は自分が來ない前の言葉まで感じた。源八郎は年少ではあつたが、その時代の武家に育つた子供である。意地と面目は充分心得てゐた。顏色が變つた。

「父上は學問はお出來だらうが、武士の御奉公は空駄目ぢや、戰場で「子曰く」を叫んだつて矢玉は除けては通るまいて——」

「隼人殿、お黙り召され」

思はず口唇をふるはして大人のやうな言ひ方で、きつと隼人を見詰めておいて、つと立上つた。源八郎は早速邸へ引返して内藏允にその事を告げた。

内藏允は病の爲に神經の昂つた顏を、ぴり〻と引緊めて、無言のま〻出席の仕度をした。

内藏允が源八郎を連れ立つて法事の場に姿を現はしたのを見た人々は、あの顏色で、これはひどいと一樣に思つた。隼人は内藏允の顏色が蒼くて、人々が尤もだと思つた氣配が一層氣に入らないのだ。

「内藏允殿、先君の法事といふのに、出られるものをお出かけ召されぬとは不忠の至り」

一徹な人間には細かい神經の動きなど目にもつかぬ、併し、内藏允の顏色の動きを見た時には、流石の隼人も、これは言ひ過ぎたかと思つた。

併しその瞬間、人數が揃つたから法事を初める鐘の音が響き渡つた。内藏允はそれで場所柄を心づいて、無念を堪へた。

法事は初まつた。そのうちに部室の入口に「入室」の札が揭げられた。戰亂後用もない無骨武士たちには、これが正式にどう讀むのかわからなかつた。「にふしつ」といひ「じゆしつ」といつた。

昔一人の識者が横を一本引いて、これを何と讀むかと弟子達に問うた。あゝだらう、かうだらうと難かしく首をひねつたが結局誰にも讀めなかつた。勿論それは一體物事はそんなもので、「入室」の讀める人がなかつた。そこで親戚の桑名友之亟といふ老人が、内藏允に何と讀んだものか、とたづねました。

「これはにつしつと讀むのが正しい。そも〳〵入室とは、皇族、攝家の公達が門跡に入院する時の稱で、當家などには不相當の言葉であるが、佛家の習慣でこゝに用ひたものでござらう」

と靜かに述べると、それを聞いてゐた隼人は、早速憎まれ口を利いた。

「成程内藏允殿は遲參はなさるが、ふだん學問なさるだけあつて、流石に坊主勝りぢや」

隼人はさつき云ひ過ぎだと思つた位で、その上の雜言といふ程の氣はなかつた。きつかけで隼人の無神經がたゝつてしまつた。

「坊主勝り」にぐつと來た内藏允は、弱い心臟の血がかつと逆流するのを押へ切れなかつた。

「先刻からの雜言思ひ知れ！」

發止と切りつけた内藏允の太刀は、病氣に弱つた腕に狂ひを生じて、憎い隼人の額を僅かに切り込んだ許りであつた。

不意を喰つた隼人は斬られ乍ら、太刀を拔いて内藏允が焦つて返す二ノ太刀をガンと受け止めたところを、隼人の弟の主馬が、後から内藏允の左の肩を三四寸斬り込んだ。

「あッ」

その瞬間バラ〳〵と馳せ寄つた人々によつて二人は引分けられた。

僅かな一瞬間が、二人の身の上に大きな運命の狂ひを生じさせた。肩先きを切り込まれた内藏允の傷は相當深手だつたが、隼人の額からは血が一節糸を引いてゐた。一切は先君の法事の場の出來事である。事件はまた〻く間に取り鎭められた。

斬りつけておいて、逆に傷を負つて返つた内藏允は、柔かい床の上に、血の氣を失つた身體をいた〳〵しく横たへて呻吟した。

やがて、源八郎と、從兄の傳藏と、奥方の弟である夏目外記とを枕元に呼んで、内藏允は切腹の決心を申し渡した。

「それは……」

といふ人々の言葉を押へて、内藏允は、

「この深手で、殊にこの病弱な身體では、到底救かる見込みはないから、切めては心靜かに切腹したい。と申して勿論一人では死なゝい。妄念も殘れば、法要の場を騷がした對手の隼人にも腹きらせるつもりだ。この場合どちらか生き殘つても、家中騷動の原となるは必定であるが、二人が死ねば納まるのぢや。内藏允は責を感じて自刄するから隼人殿も自決せられたいと、傳へて貰ひ度い。さういへば、よもや隼人も、のめ〳〵生きてはゐられまい。使者には年寄り役に、お氣の毒でも友之亟に願ひたい」

内藏允の言ふ事は道理に叶つてゐた。何かしら心の隅にうつぼつと反撥するものを感じながら、誰にも云ふ言葉がなかつた。源八郎はうつむいて、殊勝にも涙を堪へてゐた。傲氣な傳藏と外記とは、傷ましい叔父の悲壯な最後の決心に感激して、聲を呑んだ。

家内は俄かに愁傷に閉ざされた。

春の日影が障子に淡くうすれかけてゐる。寛永八年二月十九日の午後である。

座敷に砂を盛つて、裏返しにした疊が二枚用意され、白布が掛けられた。そして疊の四すみには榊

の枝が立てられた。いつの頃から決められたものか、これが切腹の作法である。用意萬端整つた。
長い廊下を渡つて、すつかり無地の衣裳に改めた奥方が入つて來た。長い黑髪が無慘に斷たれて、白紙の上に捧げられてゐた。
「お心たひらかに……」
奥方は言葉も判らぬ程に泣き伏してしまつた。いかに武家に育つても、女にはかういふ不自然な義理人情を堪へる力はない。飛びついて一緒に死にませうといふのとは全く違つたものだ。奥方は人々に助けられて次の間へ下つた。
だが友之亟は容易に戻らなかつた。長びくのは餘り香ばしい返事ではあるまい。
「お使ひは如何いたしたであらう」
待ち兼ねて、薄く眼を見開いた内藏允が聲をかけると、友之亟の息子の、賴母と三七の兄弟が、追ひかけに出むいて行つた。
この使ひも相當に手間がとれた。
庭の石燈籠の側にさし込んでゐた日永も、いつか消えてしまつた。
「返事がなくば、それまでの事ぢや」

内藏允が傷のためにめつきり衰弱した身體を、やうやく最後の場所へ運んだところへ、友之亟親子が息切つて馳せ歸つた。
「隼人は何と……」
内藏允は靜かに云つた。
「隼人奴弟の九兵衞を逢はせて、内藏允腹が切り度くば一人で切つたらよからう。自分の身體は主君に差上げたものだから、すべては殿樣の心の儘ぢや、一應の伺ひも立てないで勝手に處置するは不忠の至り、殊に我が家も、内藏允の家も、東照宮お聲がゝりの陪臣でありながら陪臣でない名譽ある家柄ぢや、内藏允不處存の交際はなり申さぬ、と申して如何に言を分けて話しても彼には解らぬ」内藏允は瞑目して、
「嫌なものに仕方があるまい。仕度をいたせ」
「隼人のことにつきましてはお心殘りなく――」
内藏允の顏をじつと見乍ら云つたのは傳藏だ。傳藏は内藏允の從兄の子であるが、早く父親を亡くして、内藏允が我が子のやうに可愛がつた若者だ。剛氣で、武藝にも秀でた二十三才の青年を、日頃から内藏允は賴もしい者に考へてゐた。今の一言は内藏允の胸に應へた。

「うむ……で皆は引取つてくれ、源八郎と傳藏は後學のためによく見ておくがよい」

だが一同は、小者だけを引取らして、目で心で内藏允をいたはり介抱してゐた。内藏允は衰弱した身體に最後の力を籠めて見事に切腹してしまつた。

その時、襖の蔭で泣き伏してゐる奥方の他に、身分のない哀れさに垣根の隙から哀惜の涙に眼をくるめかせ乍ら、内藏允の死をひつしと見守つてゐる一人の女性があつた。内藏允が生前、深く愛してゐた妾の小枝であつた。

奥平家の先代信昌が、その昔三州長篠の城に立てこもつて、武田勝頼の大軍を引受けて孤軍奮闘、遂に城を守り果せて勝を得たのは僅かに二十二才の時であつた。若年の大功並々ならずとあつて、家康の御感に預り、信昌の一族七家、家老五人に特別の御上意があつた。隼人の家も、内藏允の家も同じく其の五人のうちで、いづれも特殊な家柄であるところから、今度の騒動についても、城主は自分の一存で事を處分するわけにゆかない。そこで豫め江戸表へお指圖伺ひの使者が立てられた。

この前先代忠昌が死んだ時、家來の杉浦右衛門兵衛が追腹切つて殉死したことがあつた。當時は

剛氣一徹を武士の魂とした關ヶ原の戰ひより五十年とは續かない頃で、死んで尚忠勤を勵むといふお目出度い奴隷根性が立派にしみ込んでゐた。時には殉死の家は加祿のことがある程であつたから、將軍家初め、大名の死には多く殉死がつきものであつた。さういふ家程、よき家來を持たれた大名と評されるのであつた。ところが世が漸く太平になるにつれて、殉死の弊害を逸早く認めたのは松平伊豆守信綱であつた。彼は三代將軍死去の折り、追腹を切らなかつたために、邸の前に落書をされた。

弱臣院殿前拾遺豆州太守殉死斟酌大居士

伊豆まめは豆腐にしては好けれども
役に立たぬはきらずなりけり
仕置き立てせずとも御代は松だひら
腹をきらずはどこに伊豆々々

その爲に一層怒つて殉死を差止めたといふ巷説もあるが、ともあれ、殉死を奬勵するやうな悪風に對して、伊豆守は斷然たる處置をとる事にした。

「殉死は、昔より不義無益の事といましめおくといへども、被二仰出一こと無レ之ゆゑ、近年追腹のも

の餘多有レ之、向後左樣の存念可レ有レ之者には、常に其主人より殉死仕つらざるやう、固く申し含めておく可く候。若し以來かゝる事あるに於ては、その亡主不覺悟の法度たるべし。跡目子息にも抑留せしめ得ざる儀、不屈きに思召さる可き者也、寛永三年」

かういふおふれが出てゐること故、右衞門兵衞の殉死は、人々の氣持の中では、天晴れ、と賞讃しながら、老中の意向如何にと樣々と物議の種になつてゐた。

そしてまだそれについて江戸表の屆出でも怠つてゐる始末であつた。とは言へ、江戸表へは三十里、遠くもない所のわづらはしさに、とつくに知れ渡つてゐる事はお定りだつた。その上にまた今度の騷動だから、城主としては家中不取締りのそしりはまぬかれ難い。

「内藏允儀、亂心、法事の場において、同僚隼人に斬り付け申し云々……」

の屆出でが送られた。一種の方便のつもりもあつたであらうが、その結果は、内藏允の家は改易、一族追放に處されることになつた。それに引かへ隼人方はいはゞ斬られ損、お構ひ無之、今後一層忠勤を勵むべし、といふことだつた。

この片手落ちの處分が、人々の心に不思議にはつきりした態度を強ひた。殊に隼人の傍若無人振りは、内藏允の死によつて一層妙に氣慨を人々の心に起こさせるに充分だつた。

一族郎黨、召使ひの端までが、義に感じて、しつかりと固まり合つた。

宇都宮の東南十里ばかり山中に深澤村といふのがある。同國那須郡黑羽の城主大關信濃守の領分であるが、追放を受けた奥平源八郎、傳藏、外記、外一族五十餘名は、一先づそこに立籠つて隼人を討取る工夫をめぐらした。表立つてはとにかく、内々領主信濃守は源八郎一味に好意を寄せてゐたので深澤村の住ひは比較的安全であつた。

彼等は此處に一構への屋敷をしつらへて、各々の起臥と、復讐の仕事とにいそしんだ。

重だつた人々は、源八郎、傳藏、夏目外記などの外に、桑名三七、稻代源七郎、細井又左衞門、細井嘉兵衞、上曾甚五右衞門、菅沼治太夫、後藤安左衞門、大内十太夫、平野左門、川俣三之助などいふ人々だつた。そのうち大内十太夫、平野左門、川俣三之助の三人は、それまで江戸詰でゐたのを、内藏允の急を聞いて馳せつけ、そのまゝ深澤村の連中に加はつたのだつた。左門も三之助も内藏允の從兄であつた。その他も何等かの身寄りの者共であつたが、かういふ樣々な種類の人達が五十幾人も集まつたのであるが、隼人を討つといふ一つの目的に向つて皆の心が一致してゐた。事實、内藏允の

かたきを討つといふ氣持よりも、隼人を憎む氣持、憎らしい隼人を殺す氣持の方がずうとはつきりしてゐるやうな連中もずゐぶんゐた。原因と動機とは同じものでも、内藏允のあだを報ずるといふ氣持は、召使の端くれまで行き渡つてゐるやうな、ゐないやうな變なものだつた。だが隼人が憎らしいといふ氣持は非常に強かつた。殊に彼等は權勢に對して片手落ちな處分を非難する氣持が、いつの時代にも虐げられた下づみにされたもの、みが持ちこたへてゐる純粹な正義良心によつて激しく反撥した。彼等の立場が弱ければよはい程、握れない美しい人間の情が交流した。

だから、五十幾人といふやうな大きな一家族が、比較的、波瀾もなく一つの目的に向つていそしんだ。彼等が普通の世間人だつた場合には、多くの不自然な階級がそれ等の人々をへだて、お互の殼の中に立てこもらせてゐた。たま〳〵心を開け展げて見せようとするやうな普通な人間は、大抵の場合誤解されたり、輕んじられたりしがちだつた。

だが深澤村の生活はすつかり違つてゐた。

敵を討つといふ緊急問題の他は、何となくのびやかな生活だつた。そして誰もそれを不思議に思ふものはなかつた。誰も、各々の仕事が愉快だつた。よく〳〵の事がない限りいさかひなども起らなかつた。勿論、お互の功名爭ひもあつたが、ともかくもそれは共同の仕事を持つもの、仕事に對する愛着心である場合が多かつた。

併し、かうなると妙なもので、深澤村の連中が結束し合へば仕合ふ程、それに對抗して、隼人方に相當の人々が身方しに集まつて來た。個人同志では何の怨恨もないやうな人達が、より〳〵お互に對して血を沸かせ合ふのであつた。奥平の家中は、老若銘々に憤激し、動搖して納まりのつかない混亂狀態が、いつはてるとも知らず、城中の人々の心をかきたてた。

そこで、隼人がこのまゝゐては、また一騷動まぬかれまいといふ憂慮が、家中の重だつた人々の間に起りはじめた。

隼人びいきの若殿大膳亮のはからひで、同國壬生の城主三浦志摩守安次の處にかくまはれることになり、事は非常に敏速に行はれた。

大膳亮は騎馬の士二十人を護衞につけて隼人一行を送らせた。志摩守はやはり二十人程の士を迎へに出して隼人を守るといふ嚴重ぶりであつた。

ふだんに隼人の動勢に目をつけてゐた深澤村でさへ、この事をはつきり知つたのは、隼人達が志摩守の城へ入つてしまつてからだつた。神經を尖らした重臣連が、專ら祕密に、手早く事を片付けたからである。

だが、全く隼人達が壬生の城へ入つてしまつたのは、源八郎等にすれば甚だまづい結果である。一同が斬り込んだとしたところで、他處の城内の樣子はわからないし、小さくとも一國一城の主を敵にまはさなければならない。殊に宇都宮へも近いとすれば、いつどんな援兵の備へがしてないとも限らない。

結局隼人の隙を附け狙ふより道がない。これがまた恐ろしく困難な仕事である。敵討ちには大抵はつきもの、戰術であるが、深澤村の人々は入り替り立ち替り、姿を變へて壬生の城下へ入り込んだ。町人になつたり、百姓姿をしたり、乞食になつたりして、城近く、隼人の動勢を探るのだが、敵もさるもの、中々用心を怠らない。

壬生の城主にして見れば、一城の主ともあらうものが、一端引受けたものに手を觸れさせては面目にかゝはるといふわけで、特殊な意地も起つてくるのだつた。

壬生の城下は隼人の爲に非常に警戒が嚴重になつた。

往來の出入り口には一々番所を構へて、少しでも怪しいと觀た通行人は容赦なく取り調べた。そして隼人の屋敷の附近には晝夜見張りの者を置いて、少しの油斷もなかつた。この爲に、この事件に何の係りもない町民たちは大分迷惑を蒙むつた。

城下の通行が嚴しいといふ事になると、勢ひ通行人はさびれるし、肝心の深澤村の人々の代りに、しば〳〵間違へられた町人や、近在の百姓達が番所へ引かれてゆかねばならなかつた。

「うちのお殿樣も物好きだ。お殿樣のお道樂で、汗水流して働く俺たちが迷惑させられちや堪らない」

やがて、あちらこちらでさういふ聲がつぶやかれ初めた。けれ共お殿樣の耳にそんな聲が入つたら大變だ。百姓や町人達は口々に、誰の言葉とも分明しない聲としてしまつた。その聲は町を流れ村を吹き渡つた。

ところが、深澤村では隼人が壬生の城下にかくまはれてゐる限り、簡單に手の出しやうがない。これはどうしても、そこに居たたまらないやうにして、彼等をあの城から追出して、出る所を討つより仕方がない。

いつの間にか壬生の城下一帶に、

「深澤村の源八郎一味が、近々にこの城下におし寄せる相だ。彼等は山の中で眞田流の張拔き大砲をこしらへて、一發でお城を打落すために、その準備をしてゐる相だ」

といふ風說が盛んになつた。風說といふものは、しば〳〵人心の機微を摑んで、凄まじい勢ひで傳播される事がある。大砲の話もどこから出たものか誰も知らない。勿論作つてゐる現場を見たものがあ

るわけでもない。併し、まるで見て來たやうにまことしやかに話は次から次へと傳へられた。

「大きな聲では云へないがお殿樣が宇都宮の隼人をかくまつてゐるのがいけないんだ。つまらない卷添へを喰つて、家財道具まで失くするのはつまらない事だから、いざといふ時にはすぐ逃げられる仕度をしておかう」

といふわけで、人々は仕事にも手がつかない。

噂さははてもなくひろがつてゆく。

かうなると流石の隼人も黙つてゐるわけにゆかない。自分達のために家中、城下一帶の不穩を傍觀して澄してゐることは流石に出來ない。殊に隼人は一徹頑固で、どちらかと言へば無思慮な人間だ。何これいしきの事にと思ふと、深澤村の連中が小癪にさはつて、逃げまはつてゐるやうな自分達の立場が腹が立つて來る。

「この度は思ひ掛けませぬ手厚い御保護下され、不肖御禮の言葉もございませぬ。近頃聞きまするに深澤村の浪人達が、隼人に對する僅かの意趣を深く含んで、當御城下までも狼藉致し兼ねまじい樣子にござりまする。高の知れたる小倅共のこと故、何か計るところあつて云ひ散らす根無し事、對手に致すも大人氣ないとは存じまするが、若し、萬一の事でもござりましては、日頃の御厚恩に對してもまことに相濟みませぬ。よつて、一時いづれへか立退き、御當家の御迷惑を除き度いと存じまして、急にお暇乞ひに上りました」

ある日、隼人は志摩守の許に出て、さういつて自分の決心を告げた。

志摩守は、

「當家の迷惑などさしたる事ではないが……」

と、云つて暫らく考へてゐたが、やがて、

「何といつてもこゝは深澤村へ近すぎやう、目と鼻の間にゐては彼等も何かと騷がずにはゐられないのが當り前、一層一先づ姿をかくして彼等の氣をくじくのもよいかも知れぬ。が、どこぞ御心當りでもござるかな」

「差當つては格別——江戸表へでも參らうかと存じまするが……」

「ほう、江戸表とな……若しお望みとあれば身共がお世話申さう。信州諏訪の城主、諏訪因幡守はそれがし年來の近づきなれば、それへ參つて暫らく忍んで見たら如何かと思はれるが……」

「くれ〳〵の御志、かたじけなく存じまする。何分血迷つた小倅共、當方から押し返すは雜作も御座りませぬが、對手に取るも大人氣ない仕儀、よしなにお願ひいたしまする」

そこで志摩守は家老の戸村惣左衛門に云ひつけて、隼人の一行を信州まで送り届けさせるやうにはからはせた。惣左衛門は隼人のために侍十五人と、鐵砲十五挺を持たしてやる事にした。その時分鐵砲十五挺の警戒は餘程深澤村の連中に對して要心堅固にしたものと見られる。

そして彼等は夜にまぎれて慌しく出發した。

逃げ出すこともあらうかと、あれ程警戒と探査とを嚴重にしてゐたにも關はらず、深澤村では、遂に隼人の逃げ出すのを氣付かなかつた。彼等はひた走りに夜を馳せて信州へ落ちて行つた。それ等が容易に深澤村へ洩れなかつたのは、家老戸村の機轉であつた。

傳藏はじめそれを知つた時には、地團駄踏んで口惜しがつた。隼人を壬生の城に於ては具合が悪い何とか追ひ出し策をと計つたのはまさに彼等だつたが、とは言へ、かう急にこつそりと逃げ出されやうとは思ひ付かなかつたのだ。手ぬかりだつた。と云つてみても初まらない。彼等は急に手を分けてともかくも隼人の行き先きをたしかめた。

江戸？　江戸へ入られては行方を突きとめる丈でも一困難だ、失敗つた！　とは内心人々が心のうちに叫んだことだつた。しかし、やがて案外たやすく、隼人たちが信州へ落ちた事がたしかめられた。

隼人一行が諏訪高島の城主の許へ到着するや、彼等は領内の内ケ窪といふ所に住むことになつた。内ケ窪といふのは四方が深田で、道はただ一筋、かくれる所もなければ、ひそむ場所もない。人の姿が現れればすぐにわかる、見通しの場所で、特にかういふ場所を撰んだものと見える。

今のやうに一發の大砲の玉が方一町四方も荒らしつくすやうな時代と違つて、その頃は地の理といふものが、戰ひに大きな關係を持つてゐた。

傳藏と外記とは隼人の後を追かけるやうに早速信州へ出むいて行つたが、かういふ要害の地では一寸手の出しやうがない。

その上諏訪の城主も、壬生の殿樣と同じやうに、隼人のために城下及びその附近一帶の警戒を嚴重にさせた。こゝでも怪しいと睨まれた通行人は取調べられた。

隼人の所へ出入りする物賣りなども非常にきびしかつた。傳藏も外記も空しく隼人の屋敷を眺めて彼等が此處にゐる限り、三十人や五十人では一寸討入りも出來ない事をいやといふ程知らなければならなかつた。

「成算が立つまで待つてゐる方が愚かしい。一層討死の覺悟で斬り込んで見ようか。一か八か、死物狂ひだつたらやれなくもなからう」

傳藏はうめくやうに言つた。

深澤村の人々の氣持がやゝ沈滯し初めたことを感じて、傳藏は何となく苛立つてくる自分を時々意識した。彼等の大抵は奥平家の一族郎黨共であつた。義理や、人情を重んじて彼等の復讐に馳せ參じたものもあつたとしても、結局は彼等一族の敵にちがひなかつた。

武家階級の重さは大抵の場合一族の重さに比例した。自分だけ、といふやうな自由主義が勃發したのは、ずつと後世の事である。だから彼等にとつて、一族の重だつたものの沒落は直ちに各自の沒落を意味するというてよかつた。

だから隼人は、内藏允や源八郎の敵であると同時に、彼等の敵でもあることは明白だつた。彼等が復讐をちかふ心持は、義理人情の氣持と共に明らかに必然な成行だつた。

とは言へ若い傳藏の目に、深澤村の屋敷の空氣が最初の頃のやうな緊張を缺いて來たやうに思はれるのは何となく氣になつた。

「一層早く討つてしまはうか」と傳藏が時々思ひ立つのも無理がない。

が、彼等の中には桑名頼母とか、兵藤玄蕃とかいふ老巧の人々もゐた。長く人生を見て來た人々のどことなくゆつくりした味といふものの中に捨て難い力を持つものがある。

頼母は四十八に間近い。どこか漂々とした苦勞人である。かういふ人間が敵討などといふ角目だつたことに力こぶを入れるかと思ふと面白いが、またじつと考へて見れば大抵の成功した仕事は、馬車馬のやうには馳け出さないものだ。——目當てさへ見失はなければ——。

玄蕃は老人だつた。戰場往來の老武士で溫厚な氣持のいゝ人だ。若い者たちに強ひるでもなければおもねるでもない。難かしい顔をしてはゐるが、若い者たちの氣持を尊重する事も充分に知つてゐる。

「最一度隼人を諏訪から狩り出す工夫が肝要ぢやな」

傳藏が、

「一層人數をまとめて信州へ繰出さうか」

と滿更ら切實にさうする氣もないらしく云ひ出したのに答へて玄蕃老人は穩かに云つた。そして、

「どう思はれる？」

と云ふやうに頼母の顔を見た。頼母は默つて考へ込んでゐた。傳藏も外記もやはり、ほんとはその上の上策を考へこんでゐるのだ。

しばらく沈默がつゞいた。

「隼人の弟の主馬を先づ血祭りに上げようぢやないか」

口を切つたのは頼母だ。頼母の考へが瞬間に了解出來たやうに傳藏の眼はきらりと光つた。

「うむ？」これは立蕃老人。

「主馬亟一人が山形にゐるのを幸ひ、彼の首をおとりに使ふのだ。弟を殺されても引込んで身を守つてゐるわけには流石の隼人にも出來まい。殊にあの一徹粗暴な隼人が、直きに眼をむいて怒るのは知れたこと。怒れば占めたものぢや」

皆思はず、にッ……と笑つた。隼人の怒つた顔をちよいと思ひ浮べたのだ。

その頃奥平大膳亮は、お國替へを命ぜられて、羽前山形へ移つてゐた。内藏允と隼人との爭ひが取締り不充分の譏りを幕府の中に起させたのが直接の原因であるが、もう一つは例の杉浦右衞門の殉死問題がたゝつてゐた。引きつゞいての不祥事件に、いかに東照宮特別御聲がゝりの家柄とは云へ執政一同放つておくわけにゆかない。そこで起つたのがお國替への議であつた。

普通の家柄ならとつくの昔に、お家改易領地沒收くらゐになりかねない。御法度の殉死を恐れ氣もなくやつてのけた上に、その屈出でも手際惡いといふのでは寛容にし度も出來ない。それのみでもなし、引つづいての家老同志の密着、何といつても君主の不取締りをのがれる術はない。

併し、といふので危く、宇都宮十萬石の知行を、羽前山形で八萬石の減知にあつた丈で濟んだのはやつぱり祖先の威光だつた。

隼人の弟の主馬亟は、隼人と、父親の大學、及び弟九兵衞とが信州へ落ちた後も、主君大膳亮に從つて山形へ行つてゐた。主馬は以前から隼人一家びいきの大膳亮のお氣入りにで、一家の者共が國を捨てた後も、大膳亮が中々手離さないのであつた。だから彼は一人山形に止まつて九百石の知行を貰つてゐた。

傳藏達はこの主馬をまづ片付けようといふのである。

内藏允が切腹した日に、石燈籠のかげからさし覗いて泣き崩たれ愛妾の小枝は、その日から全く頼り所のない人間になつてしまつた。

生前内藏允は小枝を深く愛してゐた。愛してゐる點では、小枝も決して内藏允におとらなかつた。むしろ内藏允の神經質な鋭どさは、時々小枝にとつては身内の痛むやうな氣持をひし〳〵と浸み込ませ

た。そのにじみ込んだ苦痛の一しづく〳〵までが小枝の心には懐しい思ひ出を甦らせるのであつた。

聰明な申し分のない武士の奥方である内藏允の奥方を、小枝は何より恐ろしいものに思つた。何となく日蔭者の自分とは比べものにならない輝かしさをその人の上に思ひやつて、淡い悲しみを感じることがあつた。

ただ内藏允に對する愛だけが小枝を人並みな氣持にするのだつた。私の愛と誠だけは……、誰にも憚る必要はないと氣の弱い小枝はその圓らな眼を上げて、全く敢然とさう思ふのだつた。

日蔭の身の悲しさには、内藏允の最後にもなつかしい一言を交はす事さへ出來なかつた。物かげから、内藏允の蒼ざめてゆく顏色の、力なく前のめりにうつ伏した樣子まで見ながら、何となくそれは死には遠いゝものゝ感じしか小枝には感ぜられなかつた。

内藏允が葬られて、

先叟紹進禪定門

と戒名が刻まれ、奥平内藏允正輝の墓と記された興禪寺の墓地を訪づれても、心ゆくまで最後の名殘りを惜しむことの出來なかつた彼女には、空の彼方のことのやうに漠然とした悲哀がこみ上げて來るばかりで、痛切な胸の痛みとはならないやうな氣がした。内藏允の死は小枝にとつては、この上もない大きな痛手だつた。それ丈に、本當と信じまいとする、はかない努力が無意識のうちに働いてるのだ。

併し、間もなく内藏允の一家は追放、源八郎以下の一族が深澤村へ立籠るとなると、小枝はいやでも内藏允の死と、自分のおかれた立端とを認識しないわけにゆかない。

「女なんて何とはかない者だらう」

あの時代の幾萬の女が感じたやうに、小枝は女である自分の力弱さを痛感した。

「いつそ尼にでもなつてしまひ度い」

ひる近く化粧する氣にもなれないで、鏡臺の前にうつとりと考へこんでゐた小枝は、母親の聲におどかされた。

「早くしないと、柴野の旦那が見える頃だよ」

小枝はいま内藏允の奥方の事を思ひ出してゐたのだ。切腹の日の髪を切つた奥方は切りさげの未亡人姿で、實家方に引とられてゐた。それをまた自分が髪を下すことは奥方の心中立てにおもねるからで何となく嫌な氣がした。そして思はず髪の連想が奥方に對する淡い嫉妬の情を誘發した。

「まあ、殿樣が此の世にゐなくなつてから——」

おかしな自分だ、と小枝ははじめてにつこり笑つた。かつて、内藏允に愛されてゐる事を充分理解し、彼女もまた内藏允を愛してゐた小枝は、これまで奥方に對して嫉妬らしい感情を經驗しなかつた。特に聰明とか、しつかり者とか云はれる方でない、極く普通の美しい女に過ぎない小枝であつたが、彼女は不思議に素直な魂を持つてゐた。

「私は殿樣が好きだつたんだ！」

日蔭者であらうと、何んであらうと、といふ滿足の心があつた。

内藏允が死んでしまふと、併し小枝は全く世間から突き放された一人である事をしみ〴〵思つた。たつた一人の母親を對手の生活が、淋しくもあり頼りなくもあつた。年老いた母親は、夫に早く別れて小枝一人を力に生きて來ただけに、何らかと云へば生活の安定を望んだ。

柴野の話に乘り氣になつてゐるのも、母親としては無理もないことだつた。

そして小枝自身も他にどうすればいゝか全く知らなかつた。内藏允に對する思慕も、今の場合、柴野を拒絶する理由にはなり得なかつた。自分で生活することを知らない小枝のやうな女は、いくつかの思ひを胸に祕めながら、やつて來る運命を甘受する諦めに慣らされてゐた。

柴野は主馬亟の用人だつた。主馬が大膳亮の供をして山形へ行くのにやはり從つてゆく筈である。小枝と母親とを一緒に引取らうと申し出た柴野は、この供にもすぐ二人を伴つてゆくつもりで、その迎へに來る筈であつた。

大膳亮に從つて山形へおもむいた主馬亟は何とかして隼人と一緒になりたいものだと思つてゐた。内藏允を後から斬つたのは自分であるし、源八郎一家が隼人を敵と狙ふなら、隼人と一緒に力を合はせて、彼等をみぢんにしてしまふ方が手取早い。父親の大學も名前を半齋と改めて一緒に信州に落ちてゐることだし、そこには弟の九兵衞もゐる。兄弟三人が力を合せてゐさへすれば、深澤村の三十人や四十人何程の事があらう。

と、思ふので、頻りに暇を貰つて隼人の方へ行く事を望んでゐた。といつて、主取りをしてゐれば餘り勝手も出來なかつたが、深澤村の噂さが專らになり、親兄弟が信州へ落ちたことを聞くと、あらためて家老の手元まで暇願ひを差出した。

ところが恰度その時、大膳亮は江戸表へ出府の折からだつたから、使を差立てゝ許しを受けなければならなかつた。

そんなことで、とやかく日が過ぎてゐるうちに、信州から二人の使ひが、隼人及び父半齋の手紙をもたらして主馬を迎へに來た。

使ひといふのは隼人が身邊護衛のために、召しかゝへてゐた越後の浪人で二天流の使ひ手柴田勘左衛門と、大力自慢の小野德兵衛とであつた。

柴田勘左衛門は幾度か眞劍の下をくゞりぬけた人間で、赤銅色の顏には氣味のわるい刀痕を持つた男で、劍道も中々出來る上に、相當思慮もあり、堅實な信賴できる人物であつたから、隼人も主馬の迎へを安心して委しのたである。

すきさへあれば、と絕えず狙ふ敵を控へた身體には、今度の迎へは中々重大な役目である。

小野德兵衛は力自慢の大男で、常に二尺七寸五分といふ長刀を帶してゐた。のつぽな身體に似合はしい愛嬌者で日頃人々が、

「大野氏は士になるより角力取りになつた方がよろしかつたであらう」

等とからかつても、

「ワツハ……」

と、身體をゆすぶつて笑ふ位で、ついぞ怒つたことのない男だが、流石に長刀を使ひまはす丈あつて腕もしつかりしてゐるといふ評判であつた。

信州へ絕えず斥候を送つてゐた深澤村では柴田、山野の二人が旅裝で出發したことを知つてゐたし、どうやら山形へ行くのらしいといふことが解かると、主馬の迎へであらう事は容易に推測された。

迎へまで出す程ならば、主馬のおいとまも遠くはあるまい。

主馬を先づ討つて、と計劃してゐる所へ、この報導が入つたので、深澤村は俄かに色めき立つた。

寒さに向ふ年の暮れだつた。奧平傳藏、夏目外記、平野左內、上會甚五衛門、大內十太夫、川俣三之助などゝいふ選りすぐりの腕利きの外にそれ〳〵の若黨中間など合して十五人が、二三人づゝ目立たないやうに山形に出發した。

敵討ちの一念で、擊劍の稽古に餘念のなかつた源八郎は、病身な父親に似ず、健やかで腕筋もよかつた。生れ付き人の上に立つ人德を備へたやうな、源八郎は、單に美しいばかりでなく、心立てのきり、とした若者になりつゝあつた。

山形へ是非一緒に行きたいと云ふのを、當の敵隼人を討つまでは大切な身體だからと云ひなだめられて不承不承に深澤村へ殘ることになつたのである。

傳藏等の一行は山形の城下へ入つては人目につき易い。仕方がないから、山形の手前の赤湯温泉といふのに居を構へて忍ぶことにした。

信州の迎へを知つたので、いつ主馬が出發するかも知れたものではない。この好機を逃がしてはと、とりあへず來たものゝ、主馬の方でも中々用心を怠らない。殊にお暇願ひが聞きとゞけられてゐないのだ。山形の邊は有名な雪の難所だ。どちらにしても、この寒さでは、主馬の出發は春の事と思はなければならない。併し、最早主馬の出發は時日の問題だ。油斷は禁物。

山形へは若黨二人が間者に入り込んでゐたが、他は赤湯にゐて主馬の動靜を狙つてゐた。

赤湯の宿はあれ狂ふ吹雪に、冬籠りにくる客も殆どなく、ゐゐりの焚火が一行の緊張した氣持をゆるやかに愛撫した。

人々は伸びやかになり、退屈し、時には廣い土間で角力を取つたり、槍の稽古をしたりした。

やがて雪溶けの音が軒端にするやうになつた。寛の水が流れ初めた。春が甦がへりつゝある。近在の百姓達が、やがて來る農繁期を控へて米や鍋釜を背負つて湯治に來た。暫らく湯場は素朴なにぎやかさに溢れた。

それも間もなく潮の引いたやうに靜かになつて行つた。

その頃赤湯は、やうやく躑躅にや、早い位の春だつた。

毎日、誰かゞ山道を越えては山形の町に出掛けて主馬の樣子をさぐつて來た。

湯に殘つた連中は、やがて間もなく使はなくてはならない槍の手入れやら、着込みのつくろひをしながら、呑氣な話がさかえた。

まるで間もなく敵討ちをしたり、人を殺したりしようとしてゐる人間とは思はれない、のどかな空氣であつた。

併し流石に話題は主馬のこと、隼人のことが主だつた。

「隼人も口程にもなく命が惜しいと見えて、逃げかくれするが、狙はれてゐる氣持も餘りいゝものぢやあるまい」

川俣三之助だ。

「劍道でもさうだが、何事でも守るよりは攻める方が明らかなものだ。守る氣持はすでに停滯を現はしてゐる。進展性がない。隼人もどうせ遠いことではないさ」

平野左門は憂鬱に答へて、傳藏の方を見た。傳藏は槍の手入に忙しい。黑ずんだ山家の障子に、かあつと陽がはじけて、小鳥の飛んだ氣配がした。

「山形へ出かけた連中が戻つて來るのかな」
傳藏は半ば一人言みたいに云つて、潑剌とかゞやく眼を上げた。骨組のがつしりした、小氣味のいゝ男だ。年にも似ず分別もありげだが、眉宇の間には若々しい情熱が溢ふれてゐる。
「どうかしたのか？」
「いや、小鳥の蔭がさしよつた」
「二人ともゆふべは樂しみをしたことだらう」
「甚五衞門老がゐるから、解からないが、夏目氏はさうでもなからう」
上會甚五衞門は若い者ばかりの間では老人の部に入れられてしまふのだ。
「ハハヽヽ」
「ハハヽヽヽ」
一同が氣樂に笑つてゐる所へ、昨日から山形へ行つてゐた夏目外記と甚五衞門とが連立つて歸つて來た。
「面白い話がある」
外記は一同が揃つてゐるのを見ると、入口から聲をかけた。

「そら？」
といふやうに一同はにやりと笑ひ合ふ。
「昨日城下で不思議な人に逢ひ申した」
中には未だ變な風に解釋して、にやにやしてゐる者もある。
「それ、小枝といふ女があつたのを覺えてゐられるだらう！内藏允兄上が可愛がつてゐられたとかいふ……」
「うむ」と、先づ傳藏が深く頷いた。何か思ひ出したやうに——。
「あの女が山形にゐるのだ。併も、主馬の用人柴野の妻になつてゐると聞いて呆れてしまつた。八幡神社の境内で向うから呼びかけられてびつくりした。非常におづ〳〵して恥かし相だつたが、我々をなつかしがつて話しかけようとするから、初めのうちは、いい加減にあしらつて居つた。
どうやら、あの女は兄上を忘れられないでゐるやうに見える。そして、問はず語りのやうに主馬が家老の桑名釆女亟の手許まで暇ねがひを差出し、それについて江戸表へ使が立つたといふ話だと語つてゐた。その使者も、最早間もなく歸る筈で、お暇が出さへすれば主馬は信州へ發足することになつて居る。さうすれば小枝の旦那もお伴をする筈だといつてゐた。知つた人にでも逢つてはと

心もとなく思つてゐたが、あの女は若しかすると兄上の恩を感じてゐるのかも知れない。素知らぬ顔できいてゐるのに、それとなく仄めかして、主馬の樣子を語つてゐた。彼女はその時分からおとなしい素直な女らしかつたから――」

更に外記は言葉をついで「どうせ自分達が深澤村へ立て籠つたことは知れすぎて居ることだ。山形の城下へ一人や二人忍びこんでゐることぐらゐ主馬の方だつて充分感づいてゐよう。赤湯にゐることゝ、こちらの人數、動靜さへ知れなければ、こゝでなまじつか見えすいた嘘をついても仕方がない、と思つたので、默つて聞いてゐると、主馬の動靜が解かり次第、この掛茶屋の主人に手紙を屆けておかうといつてゐた。中々思ひ切つて話す樣子が、長いこと心にかけて考へてゐたのではないかと思はれるんだ」

「併し成べく用心した方がよからう」

女は……と、つけ足したい傳藏の口吻だ。

「一度意慾が沸くと女は一途で强いものだ。その茶屋も時々訪づれてみる方がよからう。何、こちらの後をさへつけられねばいゝのだから無駄になつてもいゝぢやないか」

左内は時々かういふ云ひ方をする。さうして甚だ尤もだ。

それから十日目、五日目と茶屋はいゝ仲繼場所になつた。茶屋の亭主といふのは耳の遠い小ざつぱりした年寄りだつたが、合曳きとでも思つたのか、またはそれにしては素直らしい小枝に好意を持つたのか、まるで何にもせんさくらしい顏を見せないで、手紙の取り次ぎをしてくれた。その時々の心附けも、當りまへのものを受取るやうな態度で、格別お愛想らしい笑顏も見せなかつた。そして、それは何より好都合だつた。

「お暇まの願ひが聞屆けられ候。出發の用意、同勢四十人餘りの由、發足は月代り早々かと聞き及び候」

餘り上手とはいはれない、なよ〳〵した字で、かう書いた手紙を傳藏等が茶屋の亭主からうけ取つたのは、大分おそい、六月にかゝつてからのことだつた。山にはやぶ鶯が終日朗らかに鳴きしきつて日中はそろ〳〵若い蟬の聲も交らうといふ頃である。江戸への使ひも往復二月はかゝつたであらう。

主馬はお暇がきゝ屆けられると早速仕度にかゝつた。傳藏等が內々計劃するまでもなく主馬にしても相當の心構へはあつた。これまでだつて、隼人父子が容易に攻め込めない要害へ引こもればこもる程、血につながる主馬の身邊が危險になることは解かりすぎてゐた。主馬といへども、全然自分が敵の眼を脫がれてゐるなどゝは考へなかつた。信州へ急ぐ氣持にはその危險に對する憂慮もたしかにあ

つた。父子力をあはせて一緒に居さへすれば……。深澤村何ぞ恐るゝに足らん！といつた氣持だ。

その代り、今度の道中はあぶない。隼人達はいつも巧く敵をひつぱずしてゐるが、山形から信州までは相當かゝる道中だ。途中は敵の構へてゐる深澤村の近くを通らなければならない。何處かで一度は衝突せずにはすむまい。

そこで、主馬は信州から迎へに來た柴田勘左衞門、小野德兵衞の他に、腕き、連を四五人すぐつて、用人、若黨、仲間凡そ二十四五人の一行だつた。殊に奥方もゐれば、それ相當の荷物もあつて、どうしてこつそり道中する事など思ひもよらない事に自然なつてしまつた。

「逃げかくれしたと思はせるのもいま〳〵しい」

隼人に輪をかけた程、强情我慢な主馬は輕く舌打しながら考へこんだ。

「あんなひよろ〳〵共をおそれてなるものか」

傳藏等も大分待ち草臥びれて來たが、主馬の方もじり〳〵してゐたに違ひない。いつまで用心しても仕方がない。

「一行、十六日早朝、山形出發」

と、まるで何かの合印のやうな簡單な手紙を例の茶屋の亭主から受取つたのはその前日だつた。柴野も出發で忙しいにちがいない。その中で、小枝がやきもき氣を使ひながら、やつとの思ひで寄こして置いたものだつた。

四五日前に、山形へ間者に行つてゐたものから、出立はこゝ五六日中らしい。といふ消息が來てゐたから、いよ〳〵確からしい。

併し、主馬も大分用心してゐると見えて、容易に發足の日を發表しなかつた。が、小枝の夫柴野は用人であるだけに彼にはわかつてゐた。けれども柴野は小枝の前身が内藏允の愛妾であつたことをよく知つてゐる。知つてゐて妻にしてゐる程好いてゐるには違ひないが、且又、その時代の武士らしい頑固な意地を張つてゐない男だけに、柴野が利に慧い、いはゆる利口者だといふことは間違ひない。武士らしくない男ではあつたが、流石に夫婦の愛に溺れてしまふ男でもなかつた。一番始末の惡い狡猾な男の口から、それを聞き出したのは、主馬の出發が明後日に迫つてからだつたのだ。勿論柴野も主馬の供をして行く筈だつた。

「それでも間に合つてよかつた」